
生きましょう、この世界で！

羽仏 幻呉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生きましよう、この世界で！

【Nコード】

N3189R

【作者名】

羽仏 幻呉

【あらすじ】

車に轢かれてしまった不運な少年が変なところの神様に別の世界に飛ばされてしまい？最強だと思いう力を与えられ？その世界で生きることに！楽しく生きていけば絶対何かいいことはあるさ！！
そんな小説です。

死んじゃった♪(前書き)

最初です。

読んでくれているひとがいたら幸いです。

死んじゃった♪

自分は普通の中学生だ、これは断言できる。

名前は上坂^{かみさか} 義也^{よしや}だ。

・ ・ ・ ・ ・ あだ名は察して欲しい。

毎日がとてもめんどくさいと思いつながらもまあ ・ ・ ・ 生きてきたぜ。

あー ・ ・ ・ 自分の身長は確かー ・ ・ ・ 175以上だったと思う。

いつも言われるのはこの身長で13歳だって事。よく驚かれたぜ ・ ・

・
学校生活は ・ ・ ・ そうだな ・ ・ ・ まあ特に目立ったことはしていない ・ ・ ・ はずです。

でも成績は低空飛行、しかし理科は得意。漢字の読みも得意だ。

自分の特徴については変だと思いが背が高くて黒髪で時々変な事を言うぐらいかな？

多分自分は普通の中学生だ、そう信じたい。

いや ・ ・ ・ ・ ・ 変な知識もあるから普通ともいえない ・ ・ ・ ・ ・ のかな？

言い忘れていたが自分は男であります、そして自分は人間ですね ・ ・

・ ・ ・ それは言えると思うので ・ ・ ・ ・

「どうしたのですか？ 黙りになって？」

「いやあ ・ ・ ・ ・ ・ 何でもないです ・ ・ ・ ・ ・ 」

自分はその声を聞いてまた黙った。

・ ・ ・ ・ ・ この声が誰かって？ あゝ自分の頭が大丈夫だと信じ答えよう。

自称女の神様だと言っていました。

・ ・ ・ 始めは自分も驚いたさ ・ ・ ・ だって ・ ・ ・

「失礼なこと考えていませんでしたか？」

「考えてないです！ ！」

自分は声が聞こえてくる壁に声を放った。

なぜ壁に話しているのかって？それはですね・・・何か言いづら
いのですが自分がいた世界で言うならばテレビだ。

ざ　てれびだ。その名もズバリテレビかもしれない。
聞いてみるとしましょう。

「あ・・・あのー聞きたいことが・・・」

「なんででしょう？」

とすらすらと答えてくるテレビだと思ふモノに映しだされている女
の人に聞いてみる。

・・・中学生の自分が見てもとっても綺麗だと思う、だが髪は銀髪
であることから日本人でないことが証明されたね。

「いまあなた様が映っている物や今自分が見ているこの物は何で御
座いましょう？」

「コレですか？テレビです。」

・・・テレビだそうです。

テレビか・・・家にある物に比べるととても薄いな・・・もしや壁
掛・・・

「現実にも目を向けて欲しいのですが」

そりゃあ・・・現実に目を背けたいと思うのが俺さ・・・もう少し
で・・・まい　わーるどに逃げ込めたと思ったんですが・・・

「すみませんです！」

高速で謝った。

ああ・・・まだ聞きたいことがあったな・・・聞くか・・・

「すみませんが自分はどうしたんですしたっけ？」

女の人は手元においてあったのか紙をペラペラとめくり話した。

「・・・あなたは日本時間の・・・朝8時ぴったりに車に引かれ
て・・・そのまま引かれ続けて200」

「もういいです！！分かりましたから！！もう言わないでください
！」

「もういいのですか？」

自分はちよつと声を張り上げ自分はテレビに話した。

「……自分は死んだ……だと？まだこれから人生を謳歌しようとしていたのに！！」

「ん？……確か遅刻しそうになって家をでて急いで……たしか信号を見ずに飛び出して……やめよう……心が痛くなってくる。」

質問を……続けよう。

「自分はなぜこんなところに？」

自分は死んだんだ。肉体がこんな綺麗になっているはずは……

「それはですね……我々が選んだ人間にあなたが該当していただけのことです。」

……続けよう

「……なぜ自分の体はこんな綺麗なんです？たしか自分は轢かれたはずですよね？」

「それはですね……あなたが死んだ瞬間にあなたの意識と肉体の一部を採取してバイオ技術を利用してあなたを作り出したのです」よく嘸まずにいえたな……

ん？自分を作り出した？……ワースゴイナー……

「何故記憶があるんです？」

「それも我々の最新技術を投入したからです」

「じゃあ……自分は『自分』であって『自分』ではないと言うので？」

「まあ……そうとも言いますね……しかしあなたはあなたです。あなた以下でもあなた以上でもないです」

自分はそれを聞いてから自分の体を触る

ペタペタ……

顔を触り腕を触り足を触った……自分だ。『自分』はここにいる。

「何度でも言います……あなたはあなたです」

自分はそう言われた後涙が出た

「いやだ！！自分を返せ！自分を……自分を家に帰せ！」

「無理です、地球にあなた二人居ることになります・・・今頃はもう焼かれているのではないでしょうか？」

そんな冷たい事を言われ自分は少しの間座りこんで泣いた・・・

「おさまりましたか？」

神様にそう言われた

「はい」

自分は立ち上がりテレビの前に行った。

「もう吹っ切れた！自分は自分だ！」

そう宣言した。

「ふふ・・・その意気です・・・まだ聞きたいことはありますか？」

そうだな・・・聞きたいことか・・・よし。

「・・・ならそうですね・・・ここは何処ですか？」

自分はそう聞いた。

「ここですか？ここは『天の川銀河神様ステーション』です・・・は？」

「あなた・・・神様でございますよね？」

「はい」

「神様ってそんな・・・そんな近くにおられたのですか？」

「そうですね・・・この場所は結構本部から離れていますので・・・田舎といったところでしょうか？」

田舎なのか。自分はこんなちっぽけなのか……

「へえ……それではこの部屋は何ですか？」

「あなたの為に作られた部屋です。……すぐどこかに行くことになるでしょうが……」

なんか最後ぼそっとなんかいったよ！

「すいません、最後の良く聞こえなかったのですが……」

「あなたはですね……私たちの暇つぶし兼実験体としてどこかの世界にいつてもらいます」

なんか不穏な言葉が聞こえた……。まあいいか、もう知らん。どうにでもなりやがれ！

「どこかの世界というത്？」

「そうですね……」

1つ目はなにか魔法などが使える地球より1，23倍大きい世界となります。

2つ目は……」

「一つ目で……！！」

即答。ただそれだけ。

「お早いですね……。1つ目と……。それではあなたには何か能力を付与されます。」

「自分が望んだ力をすぐ使えるようにお願いしたい！」
またとないチャンス！とばかりに又即答。

「少し難しいですね……」

と少し困った顔……。よし。

「へえ……神様って……。ヘボ……」

コレでどうだ！

「へ？！……出来ます！！絶対出来ます！！お待ちください！」
そういいながら神様はバタバタと走っていった……。音がした。
暫し待つことにしようか……

「お待たせしました!!!!!!」

「わっ!!」

びっくりした!!

「っできましたか？」

「はい!では頑張ってください!」

そう言われた直後自分の足元が抜けて落ちそうになった・・・ぎりへりにぶら下がってる・・・あつぶねー。

「な?!」

「ビックリしましたね?・・・ところで何時になったら使えるようになるの?」

「その世界にはいったら使えるようになります!!」

そう言われた直後掴まっていたへりまでも落ちた。

「うわああああああ!!!!!!」

自分はそう叫んだ後意識が飛んだ。

落下後×着地×ここはどう？

「はああああ！！！！いやああああ！！！！！！！！」

自分は奇声を上げ現在進行形で落下中！

たしか・・・神様にパワーを貰ってから足元が落ちて落下してる時にため息がしていた気がした。

「神イイ！！貴様アア！！何故落とす！？何故足場が落ちる？！ビツクリだボケエエ！！」

落下してるのもかわらず全て言い切った。

シューイイン

そんな音がして目の前に・・・なんて言えばいいんだ！？あのく少し半透明な・・・いいや！窓だ！窓でいいや！

『どうかしましたか？』

さっきの口調とは違って最初の落ち着いた凜とした話し方だ。

「どうかしましたかじゃないす！なんで落ちてるのです？！せめて神様ならテレポートとかテレポートとか何かできるのではないですか！？」

『それは出来ないのです・・・あ、あなたにはもう能力を付与したので何かできるのではないのですか』

「能力！？こんな状況で何か思いつくかアアア！！！！」

『そうですか・・・では頑張ってください。』

シューウン・・・

「うっわ！キタネエ！逃げやがった！」

そんなことをいっている間も現在進行形で落下中であります・・・って木の上に落ちそうだ！

「何かないかなにか無いか！？ええーっと・・・ええーっと！・・・ギヤァー！！！！！！」

木に落ちました。

「あだだだだだだ!!!」

枝に枝にドンドン上から下に落ちていった・・・
ドン!!!

「あつが!!!」

腰から落ちました。

「あタタタ・・・ん？」

少し悶えたあと周りを見回した・・・エ?

見渡すかぎりの木。上を見ても木、もう一つおまけに足元草がいっぱい。

・・・これらの証拠から考えるに馬鹿な自分でも森とかに落ちたのがわかる。

・・・でも何か・・・足元の草が青だったり赤だったりしている・・・
・毒ありそう。

「危なそうだな・・・」

そう言い自分は辺りを見回した・・・あった岩、ナイス岩! 僕の座る場所になってください!

「よいしょおい・・・ぷふ・・・」

自分は岩に座ると少しため息。

ここで少し休憩がてら考えるかな・・・

えー・・・自分は死んでる・・・はずけどなー・・・自分はここにいます! 自分は生きています。

・・・死ぬ・・・実感湧かねー・・・あー・・・次だ、うん。
この世界は・・・魔法が使える・・・っていったな

って事は! もし誰か使える人にあつたらまずあぶねえな・・・

そう考え自分は体を見回す

「ああ！！絶対この格好は怪しまれるってえ！多分！」

今自分が着ているのは・・・学生服だから・・・目立つこと間違いない。

ここでふとさっきの話を思いだす・・・

それは能力の事。

神の話では自分が望んだ能力を使えるっていったな・・・嘘だったら・・・叩きのめす。

・・・まあ・・・使えないって事はやってみないとわからないのでやってみることにしようか。

自分はスッと立ち上がり少し悩む・・・

「んなもんすぐ思いつかんわ！！」

軽く地団駄を踏む・・・なにしてみようか。

「・・・よし！」

自分は右腕を高くあげこう言った。

「来い！！『ガンブレード』！」

上げていた右腕を振り下ろしそう言った。

シャンー

絶句、マジ絶句！

「うわぁ・・・マジかよ！」

右手の持っている剣を高くあげ振り回す。

・・・自分は何かを持って何故こんな喜んでいるか？

それはですね・・・あの有名なRPGの壁とでも話してろって言ってる青年の武器が出てきたんだぜ。

んー・・・大きさ的には自分の腰から足にかけて位の長さ。結構重いけど振り回せないってことはないと思う。

そう自分は考えてワキヤワキヤしていると何かが動く音がした。

ざっざっざ・・・

「・・・何だ？」

持っていたガンブレードを・・・

どうやって戻すんだ・・・こうか？

「戻れ」

シャン

右手のガンブレードを持っていた手のひらを中心に光がパアッと光って消えた。

「ほう・・・こうすれば消えるのか・・・覚えとこ。」

自分は音がした木のところを目を凝らした・・・

ほわっと？ほわっと　いず　ざっと？

自分は目を疑った・・・なんかいる・・・なんかいるよ

・・・猪？猪なの？でも何かちがう・・・そうか肌の色か・・・赤くね？赤いよね？

自分はそれを又よくみてみた・・・うん、赤だ！真っ赤じゃないよ霞んだ薄い赤だけだね・・・

・・・ん？自分は頭がおかしくなったのかな・・・こんな物地球に・・・あ、地球じゃあねエか。

・・・でかくね？

この一言。まさしくこの言葉が似合うと思う

「ぶふううー・・・」

・・・4メートルはありそうな猪が辺りを嗅いでいる・・・ヤベエ・・・危なくね？

「ゆっくり・・・ユウウツクリ・・・」

顔を出していた木から顔を引っ込めてゆっくりと後ろに下がっていく・・・

バキッ！

・・・詰んだ！絶対に詰みだよと考えて少しフリーズした・・・言葉に言うなればギギと錆びた歯車みたいな声が出るぐらいゆっ

くりと首を回し後ろを見る・・・

「ブルルルルル・・・」

自分が想像していた猪そっくりの行動した・・・
前足をザッザッとかいてこっちを見て睨んでくる・・・

「うわああああア！！！！」

「ブルアアアア！！！！」

猪との生死をかけた鬼ごっこが始まった・・・

（????）

ガシヤンガシヤン・・・

ガサガサガサ・・・

草を分けて歩くたくさんの足音が・・・

「・・・暇だ」

「そうですか」

「暇だと言っている」

「そうですかもう少しで情報の場所につくので我慢を・・・」

「ああ・・・わかってる」

と先頭をきって歩いている黒髪の青年が暇そうにそう呟いた。そして二番目を歩いている兵士が慣れている感じに答えた

「・・・むう・・・」

青年はそうつぶやいてうつむいた・・・

この所魔物がとても多く出現している・・・

それをこの討伐隊が色々なところを跳び回って狩っているのだ・・・

しかし簡単に討伐と言っても色々な下準備をしてからなのでとても

時間がかかりあまり多くの魔物を狩れないということもある。

それに魔物と一括りに言っても色々な種類があるので悪戦苦闘することが多い……

それに毎回の如く討伐隊の何名かがぬけているので今回の魔物討伐の人手が足りない……

「……なあ？」

「はい？」

そう後ろを振り向いて兵士に聞く

「今回の魔物の情報は？」

「ああ……確か『ムルウ』って奴だっと思ってました」

「ほう……ムルウね……」

青年はそう呟いて前を向き歩きを少し早く歩いた

「ムルウね……」

ムルウとは体長が3オリぐらいのとても大きい生き物だ。牙や足には刺が生えていたりする化物だ。

そんじょそこらの弱い魔法では傷すらつかん……それに分厚い皮で剣などの物はあまり効かない……ならどうするか？どうやって討伐するか？それは落とし穴などを作りそこに落として衰弱したところをズドンだ。

コレはズルいとも言われるが……死んだら元も子もないだろう？大概この落とし穴作りで時間がかかるのだ……

しかし今回は森だ……今も森の中を進んでいる……確かもう少ししたら発見場所に辿りつくと言っていたが……どうやって倒すか……

今それをこの青年は悩んでいるのだ……

「むう……」

「幸せ逃げますよ？……ん？」

「どうかしたか？」

青年が止まった兵士に聞いて後ろにいる兵たちに止まれの合図をだす。

「今何か・・・人の声が・・・」

「人？こんなところにか？」

「はい、たしかに・・・」

「どっちだ？」

と聞かれた兵士が

「あっちです・・・」

と進んでいる方向の少し左の方を指さして言った

「そうか・・・急ぐぞ！」

と素晴らしい後ろの兵たちに号令をかける・・・

「間に合ってくれよ！」

青年はそう言い兵たちと走った・・・

（義也）

「ぬぎやああア！！！！！」

「ブルウウウ！！！！！」

ダダダダダダ・・・

只今命をかけた鬼ごっこをやっています・・・

「いやああア！！！！！」

そう言いながら木を避けてドンドン走って行く・・・

「・・・」

走っていく途中で後ろをチラリと見る・・・

「ブルアアアア！！！！！」

ドオン！！ドオン！！！！

・・・木をへし折りながらお構いなしに走ってくる・・・

「見なきゃよかったアアアア！！！！！」

「ブルウウウ！！！！！」

と終わりの見えない森の中の鬼ごっこを繰り広げてきたが

「光だ！！！」

途切れ途切れの光が見えた・・・

「ぬああアア！！！」

最後の力を振り絞り光に飛び込んだ・・・

「くっ！！・・・」

光からでたらすぐに右に飛んだ・・・

「ブルアアアア！！！」

思ったとおり真っ直ぐに走っていくアレ。

「よいしょ！！」

横っ飛びした後すぐに立ち上がりアレの方を見る・・・は？

ドカーン！！！！

「ブフウウー！！！」

岩ぶっ飛ばしたぞ・・・

「フンフン・・・」

とアレは鼻を動かしながらこちらを睨んでくる・・・

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

にらみ合い・・・そのなかで自分はこう思った

どうしよう？

今まで逃げてきたがどうするか考えてなかった・・・

「ブルアアアア！！！！」

アレは突進してきた・・・避けられない！

向かってくるあいつに離れろと念じた

「ええっと・・・『異議あり』！！！！」

右腕を出し人差し指をアレに向けそう叫んだ

「ブフウ！！！！」

ドンとっそんな音が聞こえたかと思うとアレは10メートルくらい吹っ飛んだ。

「！！？」

驚いたのはこつちである。

だって吹っ飛んだんだぜ!??

しかしこれは勝機!! とばかりにアレに狙いを定めこう叫んだ

「『ホーリー』!!!!!!」

ゴオオオオ!!!!!!

「ブアアアッア!!!!!!!!」

・・・・・・は? え? な? 何が起きた?!

たしかホーリーと叫んだ瞬間とてつもない白い光が上から・・・・光

の柱みたいに一直線に天からアレに向かって降り注いだ・・・・

・・・・消えちゃったしアレ・・・・ホーリーって聖なる光だっけ?

と少しリアルエスケープを試みてみたがビクリしすぎて腰抜けた
ぜ。

「ふは・・・・・・」

自分はそう言いバタツと横になった。

周りを見渡すと一面の花畑

空は快晴

土は柔らかい・・・・・・結論・・・・寝やすい

サアア・・・・・・

とそよ風が吹いて来た・・・・コレは寝てくれと言っているような物
ではないか?

「おやすみなさい」

そう言い自分は目を閉じた・・・・

落下後×着地×ここはどっ？ (後書き)

頑張ろう・・・

すいませんでした。いや、まじで。

「……?」

「……!」

横を歩いていった兵士が急に身構えた

「どうした!」

黒髪の青年は驚き兵士の行動に答えを求めた

「追われています!」

「誰が!」

切羽詰まったようにそう答えた

「分かりません!! 黒い服を着た……男の子のようです」

青年は目を凝らした

「……よく見えるな」

「それが取り柄ですから!」

と兵士は嬉しそうに答えた

「行きましょう!」

と走り出そうとする兵士

「待て」

ぐっ

「うぐっ……」

青年は兵士の首のところを持って足を止めさせた

「おい……落ち着け」

「はい……」

少しシュンとしていた、なので青年は

「伝令石を持って来てもらえ行軍してるから」

「はい!」

シュンッ!

と兵士は走り出した……いや消えた

(能力か……便利でいいね……よし!)

「全隊急ぐぞ!!」

と号令をかける。と同時に

「ぬぎゃあああア!!!」

ドオン!!!ドドオン!!!

と激しく何かが当たる音や、叫び声がした。

「!？」

「何だ!？」

「何が起きている!？」

と先頭の青年が身構えると同時に後ろの兵たちが騒ぎ始める

「.....」

青年はまた目を細める

「.....ちっ」

見えたのだ、ムルウが何者かが襲われているのを。

彼は王に受けた命令を思い出した。

『これ以上被害を出させるな』

この言葉が、重く彼にのしかかる・・・

「全隊!!!急げ!」

と走りだす、と同時にさっきの兵が戻ってきた

「ただ今戻りました!はいどうぞ!」

「悪い!」

と石を受け取る。

「護衛部隊!!!」

彼は石に向かってそういった、そして少しの間があつて

『は、はい!こちら護衛部隊!』

と若い声が聞こえてくる。

「警備を厳重にしろ!!!姫様を絶対守りぬけ!!!」

『はい!!!分かりました!!!』

と声が聞こえなくなる・・・

「よし・・・」

とムルウと何かが走っていった方角に走る。

「くっ！」

と全力で走る・・・

「止まれ！身を地面すれすれに！！」

と彼は走っている後ろの兵たちに向かって号令をだす。

・・・何故彼は兵たちを止めたか？王から受けた命令があるのに。
それには幾つかのことがあった。

一つ目は自分たちの身の安全だ。

王から命令をうけていても彼は止まった・・・

それは『もう被害を出すな』といった感じの言葉だった。

もし・・・あの誰かを助けられてもムルウがこっちに突進して来たら被害は大きくなる。

もう一つ目は彼の格好だ。

少なくとも我らが国にはあんな黒くて金色の何か付いた服など存在しない、それに彼はほかの国なども渡り歩いたのにもかかわらずこんな服を見たことがなかったからだ。

彼は森から出るか出ないかの所に陣取り少し様子を見ることにした・

・

「・・・・・・」

青年はすべてを見逃さないために花畑にジッと目を凝らした、すると

「異議あり！！！」

と何者かがムルウに向かって右手の人差し指を向けてそう叫んだ。
すると・・・

「ブフウ！！？！」

青年は目を見開いた・・・自分は自分の国の中では強い方の部類だ
といってもいい力を持っているはずだ。

しかしこんな自分でもこんな化物を吹っ飛ばすくらいの力は持っていない・・・

ならば彼は他の国の者か？・・・

そう考える彼にもう一つ不可解なことが起きた……

黒い服をきた何者かは右手を高く上げた

青年は何が起こる？と少しおもしろ半分にし身を乗り出した。

「『ホーリー』……！」

ゴオオオオ……！！！！

「ブアアアッア……！！！！！！！！」

「！？！？」

青年は驚きの表情を浮かべた……

自分は……こんな魔法など使えん……いやアレは魔法なのか？

……あんな天高いところから……自分は……こんな魔法は

使えん……

と少し落ち込んだ表情を見せる……しかし前ははっきりと見る……

・興味があるから。

「……」

と又目を凝らして見る……

「ん？」

何者かはドツと体を地面に落とし、両手両足を大きく広げた。

「ん……起きないな」

と疑問の声を上げる。

そう何者かは起きないのだずっと。

「寝ているのか？」

と青年は声を上げる……

ありえない……何故あれは寝たままずっと起きない？魔物にやられてしまうかもしれないのに……

そんな考えを頭に浮かべる・・・そして決断した。

近寄ってみようと。そういうワケで彼は右手を高く上げ待て、の合図をした。

「隊長!？」

と兵士が立ち上がり後を付いて行こうとする。

「待っている」

と抑える

「はい・・・」

とさっと膝を地面に立てる。

「よし」

と青年は歩き出した

「・・・」

無言で、ただ着々と何かのもとに歩く。

「・・・何？」

と驚きの声を出す。

そう彼が見たのは

子供だった。

背は高いが顔がまだ大人みたいな顔をしていない

そこから判断した。・・・起こしてみるかと判断を下した直後にそう決めた。

「・・・」

彼は静かに左腕を上げクイッと自分の方に腕を曲げた。

ダダダダダダ・・・

全兵士を集合させる・・・まあ集合といっても五十数人なのですぐに集まった。

集まった兵士を見てから何者かに槍を向けろと合図をした。

ザッ!

と円の形になり槍を構える・・・いい速さだ・・・と確認した後

コンコン

「起きろ、坊主」

足で肩辺りを蹴って起こす。
すると

「んゝ．．．」

と唸り声がした。

ゝ義也ゝ

．．．．．
．．．．．

コンコン

「起きろ、坊主」

「んゝ．．．．．」

自分はそんな肩あたりに響いた感覚で目を覚ます

「ふぁゝ．．．ん？」

大あくびをした後周りを見る．．．エ！？

いっぱいの人達がこっちの方に武器．．．槍を向けていた。
寝起きの頭でもはつきりわかった。

非常事態なのだと

「え？」

自分はそんな声をあげた

「よお．．．お目覚めかい？」

と右側に目を向けると人が立っていた・・・

座っているからなのかもしれないがとても大きく感じるかしおや
じはもっとデカイがな！

ん？おやじ？189だが何か？よし、思考を戻そう。

顔からすれば男、しかし若い。

とりあえず俺よりはデカイ。

ん・・・どういったらいいかわからない・・・いや訂正。

イケメンだ。まじで。

と色々考えていたが

「どうした？言葉が通じないのか？」

と男が顔を覗かせてくる。

「はい・・・伝わってますよ・・・で何ですか？この人達は？」

とそういった瞬間360°。周りにいる兵士の人達がより周りを槍で
狭くしてきた。

「そうか・・・めんどくさいから・・・一気に質問するぞ？」

と顔をのぞかせたままそう聞いてくる。

自分は一つ提案を試してみた

「話したいのは山々なのですがね、こう・・・武器を自分にむかっ
て向けられてるのは・・・いささか話しづらいとは思わないので？
あなたがこの立場だったら？話したいですか？」

とマシンガントークしてみる。

「・・・下ろせ」

といって右手を上げた、すると一斉に槍を下げた・・・

「ふうう・・・」

と安堵のため息をついてみる・・・

「いいか？」

と顔をのぞかせたまま聞いてきた

「ちよいと顔を退かせてはくれないますか？」

「おおうすまんね」

といって顔を引いてくれる・・・

「それで何が聞きたいので？」

と立ち上がりながら聞いてみる。

「ああ・・・単刀直入に聞くぞ・・・さっきまでいたムルウを倒したのは・・・お前か？」

それとお前の名前は？なんだ」

一気に確信を突いてきたな・・・どうするか？もしかしたら嘘ついても無駄かなあ・・・

もしかしたらみられている可能性が大有りなのでココは普通に答えるか・・・

いやいやちよつと待て、あんな化物を倒したのが自分と知ったらなにしてくるかわかってない。

名前はいつでもいいか・・・どうにもなるわけじゃなし・・・遠回りにいつてみるか？・・・そうしよう。

自分は長い沈黙の後口を開いた。

「あのお・・・誠に申し訳ありませんがあの化物はムルウと言うので？・・・それと自分の名前は上坂義也です。」

・・・これでいいか。

目の前にいる男の人が少しビックリしてこう口を開いた。

「お前・・・ムルウを知らないのか？あんな有名な化物を？」

やばい・・・墓穴を掘ったか！？もしかしてみんなが知っている化物だったの！？どうしよう・・・マジでどうしよう？・・・嘘を付くか・・・

「ほへー・・・ムルウって言うんですね・・・とても自分は小さい村で育ったのであまりそういう知識がなくて・・・」

と自分のなかで今のところ一番の嘘をついてみた。

「ふうん・・・」

と立った自分を・・・背が高いからね、見下ろして心を見抜いてくるような目でこちらを見てきた。

やばい、目をチラチラとしかほかに移せない・・・どうするか？

「ならば・・・お前の村はなんて名前だ？」

自分の嘘のとても柔らかいところを突いてきた……もうやめて、自分の心の耐久力はもう0よ！……と絶対ツツコミが帰ってきそうにない事を心のなかで呟いた。

「……………小さすぎて村の名前なんてないと思いましたけど？」

と外見では涼しく……無駄かもしれないが涼しく、内心汗ダラダラでそう答えた。

そう呟いた瞬間あいつはフツと笑った。

「ほう……名前がない……ねえ？……嘘だな」

自分の嘘は突き崩された……やっべー詰んだ！？マジ詰んだ！？「え？」

「我が王国はもし村を作るなら絶対に王都へ貢物や金を持っていかなくては行かない。それに……名前の無い村……あり得ないんだなあ……王都には村の名前を載せた帳簿がある……もしかしてお前……他の国から来たのか？」

「……………」

とりあえず無言……詰んだ、マジ詰んだ！？……たしかに他の国ですけど！！別の世界から来ましたなんぞいたら何されるか判らない？！どうするか？！

と考えていたら

「ふうん……ならとりあえず……陣に連れていくぞ」

と後ろにある何かを入れるオリに親指をくいつとしていた。……入れているか？あのオリに入れているか？あのいかにも何か捕まえますって感じのオリにはいれているか？

「あの……自分の身の安全は確保されるので？」
とりあえず聞いてみる。

「……………どうだろうな？すべては主君にまかせてあるのでね……
……運が悪ければ……」

首でも落とされるんじゃない？」

とにしし……と簡単に言ってきた。

え？え！？死ねっただけ？二度死ねっただけ？逃げるか！？どうする！？……でもどうやって？！

かんがえろ！！どうする？！

「とりあえず……捕まえろ！！」

ザッ！！

速い！鎧着てるのに！？しかし俺には追いつけまい！

……恥ずかしいがやってみるか。

「ジャッジメントですの」

フッ！

「な！？」

自分を取り囲んでる兵たちの後ろにレポートした……この技は……あれだ……自分のあまり良く知らんがスーパー電撃ビリビリ砲に出てくる……誰だったっけかな？あー……思い出せん。なんでこう言ったのか？それはね……ノリです！

ヨオシ！！今だ！みんなが探してる間に！！逃げろ！

「走りながらの……武器召喚！チャクラム！」

シャンー

出た！

「燃えろ！！！」

技名は忘れたが自分の想像でどうにかんたはず！

ゴオオオオオ！！！！

かけえな……なんだっけファイアウォールだったけかな？

「うわあああ！！！！！」

「なんだ！？」

「危ない迫ってくるぞ！？！」

たしかこの技は相手に迫っていく火の壁……だったはず！！もう一回能力行使！！

自分はチャクラムを持ったまま能力を使った次の能力を使った。

「フラッシュ！！」

ダッ！！！！

一歩歩いただけなのにものすごい行けた!!!!!!それに残像が見えるぜ!!!!!!

「あ!!!!!!マテコラ!!!!!!」

「待つもんか!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

能力を使って一気に走っていく……

「っはっは……」

森の中を現在能力を行使して疾走しておりますが……疲れた……部活をしていたんですがね。

部活?それはあとで話します。

砂煙をだしながら走っていた足をとめる。

「ああ……もう大丈夫かな?」

と後ろをちらりと見る……追っ手無し。ということだとりあえず安心つつうことで。

自分は近くにあった木に座る……すると
ジャバツ

「う……」

水の上に自分は尻を置いてしまったようである。……水?
と自分は周りを良く見渡し確認する……マジか?水?イヤッホ
イ!

自分の座っていた場所に強く両手を押し付けてみる・・・無駄だったようだ。

水は少したまったが完璧に濁ってます。
ちえー・・・喉乾いたのに・・・

「水を・・・さがそう」

自分は薄くある水を追ってみた。

「少しずつ水が増えてきたな」

ジャバジャバ・・・

と水を蹴って歩みを進めていく・・・大分水深が・・・きたかな？これは。

えーと・・・今の水深10センチぐらいです。

「もうすこしかないと・・・」

ジャバツ！

と木の出ている根つこのところを飛び越えて水を飛ばす。

「ん・・・綺麗だな」

そう、結構辺りが綺麗だった。大きな樹が360。何処を見渡しても木でたまに鳥が飛んでるし虫も飛んでるし、空気はおいしい。・・・鳥と言っても雀みたいなものから孔雀みたいなものまでいる・・・ビックリだね、虫もとてもデカイのがいた、鳥肌がたったぜ。こう・・・ゴワワワって。

「もうそろそろ来ないかな・・・お！！！！？」

足元ばかりみていた目を前に向けてみる・・・あったぜ！なんか

すごい池？が！

「ウオオオ！！！！」

と根っこを飛び越えながら湖を目指す、そして……飛び込んだ。
ジャッバン！！

「……ぷはぁ……んぐんぐ」

どんだん水を飲んでいく……

ここで一寸ビックリ。結構深さと広さがあった。

「……もののけ姫みたいだな」

と平泳ぎをしながら対岸を目指す。

「ん……おう？」

と自分は何か見つけた……人？

「とっ……潜っていつてみるか」

俺の潜水能力をナメるなよ……っと……

ジャポン……

と波紋を立てて潜る。

……水の中からその人を見てみる、そして頭をだしもう一度確認。

「がっば！！！！」

と驚いて思いつき水を飲み込んでしまった……

見ちゃったものは……とりあえず個人のご想像にお任せします！

水を思いつき飲み込んだので立ち泳ぎで空気を……空気をお思
っていたら咳き込んでしまった。

「ゴッホ！！！！ゴホゴホ……ガハッ！！！！」

「！！？」

と水浴びしていた人が驚いて湖のすぐ近くにあったテントらしきもの
に入ってしまった。

「……やっちまった……」

と立ち泳ぎで待機してましたがとりあえずあっちいつてみよう……
ザバァ……ザバァ……

うん、平泳ぎすげえ楽。着衣泳ぎでもしずまねんだもん。

結構泳ぎには自信あるぞ・・・っとお

「やっと着いたな・・・」

ザッザッ・・・

と藻だらけの所を注意して歩く・・・お？テントからさっきの人
っぽい・・・のが出てきた。

格好は銀の長い髪・・・顔？あり得ないくらいの超美人、結構タイ
プ。で！灰色の・・・かっこいいタンクトップと同じ色の長ズボン・
・・・動きやすそうだね。

「・・・・・・・・・・」

完璧な無言。睨んでる。コッワ！

「・・・・・・・・あなた」

高くて綺麗な声だ・・・

「！・・・ハイ？何で御座いましょう？」

突然で一寸驚いて少し声が裏返ったけどまあ・・・行けたんじゃない？

「・・・・・・・・見ましたか？」

・・・・・・・・答えに困る。そんな事言われても。不可抗力だ！！

「どうなんでしょう？」

「・・・・・・・・見ましたか？見たんですか！？」

と語尾を強めて目の前に歩いて来る。

「えー・・・・・・・・あの・・・」

「どっちですか？！！」

「はい！ちよつとだけ！」

うん、この答えはあっていると思う・・・別に全部見たわけじゃな
いよ！ほんとに一瞬だから！！

不可抗力だってェ！！！！

「・・・・・・・・・・」

やばいよ・・・ゼツてえ怒ってるよお！コッワ！！

「あのー・・・・・・・・もしもし？」

と声をかけてみても反応なし。って言うかから震えてるし・・・

「・・・・・・・・・・」

何か無言で右足をゆっくり上げ始める。

「・・・？」

と自分は不思議がっていたが

「ふっ！！」

「っわ！！」

超速い頭を狙ったハイキック！始めて見た！それをしゃがんで避けたのも始めてだ。

「っや！！」

「っほ！」

今度は反動を利用した左後回し蹴り・・・腹めがけてきたのをすつと避ける。卓球部を甘く見るな！！

「ぜりゃあ！」

「っふ！！」

全力の左前方蹴り・・・を左にサツと避けられた。
ぐっ！

二人ともバックステップで距離を取る・・・コレで少しは致命傷を避けられるべ。

・・・こういう時の流儀は武器を使わないこと。あっちの世界では結構ケンカしたんだぜ！（大半が負けています）。

グッ！

「！？」

女の人が一気に踏み込んできた！？

「せい！」

ガン！

「っくく！」

あんな至近距離での肘鉄・・・しかも水月を狙ってたし！それを両腕をくつつけガードする・・・

コレ結構痛いじゃ済まされない！

コレ又パツと距離をとって下がった・・・ならば！

「ぜりゃあ！」

「つく・・・」

こっちも踏み込んで右手でグーを顔めがけて飛ばす。何？殴るなつて？なぐんねえよ！かわいそうじゃない！

顔に当たる瞬間パーにする。・・・大概はコレで隙ができるはずだ。

「うっ?!」

ほおら・・・一瞬気がそれた。

「っだぁ！」

ガッ!!

「はっが!!」

左足で横っ腹を蹴る！許して！

「・・・」

少し女の人は左の方にずれた。

あ、又女の人が距離を取った。今度は何が出るんだ？

また走ってきた・・・

「せいっ！」

そんな掛け声からは考えられない攻撃が出た。

どんな攻撃？それはね！体を地面と平行にしてその体制から右後ろ廻し蹴りがきた。

ようするに・・・かかと落としてである。

「うぐおお!？」

ドゴオ!!!

そんな音がして地面に足が・・・埋まった。

よおし・・・チャンス！

「よしっしょ!!」

ズダン！

「くっ！」

体勢を崩したところを首に手を回しそのまま地面に首を持ったまま地面に倒す。

「よいしょ・・・オレの勝ち！」

倒して完璧に手足を動かせない様にして自分はそういった。これね・
・・本当に使えるんだぜ。

「・・・つく・・・」

と逃げ出そうとしてる・・・離すか・・・
パツと体をどけた

「え？」

とそんな声が聞こえた

「ふふ・・・ああ？」

急にとても強い立ちくらみ・・・

「っが!!！」

バチャ!

と水面すれすれに倒れこんで・・・意識が飛んだ・・・

すいませんでした。いや、まじで。(後書き)

疲れた・・・

逃走劇、あっちサイド。

「???」

コンコン

肩あたりを足でつつく

「んんんんん」

そんな唸り声でした・・・起きたようだ。

「ふあゝ・・・んんんんん」

少年は大あくびをして周りをキョロキョロしてる。あ、顔が驚きの表情になった。

まあ・・・そりゃそうだろうな。だって周りを兵たちに槍を持って囲ませてその中に俺と少年がいる・・・コレでまあ安全に対処出来るだろう。

「え？」

そんな呆氣にとられたような声をだした。

・・・声をかけてみるか。

「よお・・・お目覚めかい？」

と座っている少年に声をかける・・・反応がないな・・・しかし顔を凝視してきた

「どうした？言葉が通じないのか？」

と顔をのぞかせて聞いてみる・・・どうだ？

・・・

「はい・・・伝わってますよ・・・で何ですか？この人達は？」

とりあえず言葉は通じたようだ・・・何故かこの人達は？と言った瞬間周りの兵たちは槍でさらに囲みを狭めた・・・

「そうか・・・めんどくさいから一氣に質問するぞ？」

と自分は少し後半の言葉を見殺し、顔をのぞかせながら確信に迫る準備をする・・・する

「話したいのは山々なのですがね、こう・・・武器を自分にむかつ

て向けられてるのは・・・いささか話しづらいとは思わないので？
あなたがこの立場だったら？話したいですか？」

と一気にたたみかけてきた・・・

こいつは怖くないのか？・・・面白みがあるな。

とりあえず下ろさせるか

「・・・下ろせ」

と声をだし槍を下ろさせた・・・後ろでは何か黒いオーラを感じ
るが・・・まあ勘違いかな。
すると

「ふうう・・・」

と何か安心したのかそんな声を上げた・・・まあ当然だろうな。も
ういいだろうか？

「いいか？」

自分は覗き込んだままそういった・・・

「ちよいと顔を退かせてはくれないですか？」

・・・自分の今の立場分かって言ってるのか？・・・まあいいや

「おおうすまんね」

と自分はすつと顔を引いて答えた・・・まあ礼儀というものか
な？

「それで何が聞きたいの？」

少年は立ち上がりながらそう聞いてきた・・・よし

「ああ・・・単刀直入に聞くぞ・・・さっきまでいたムルウを倒し
たのは・・・お前か？それとお前の名前は？なんだ」

コレくらいの声ならば答えてくれるだろう・・・

少年は長い沈黙の後口を開けた

「あのお・・・誠に申し訳ありませんがあの化物はムルウと言う
ので？・・・それと自分の名前はかみさかよしやです。」

・・・は？こいつあの有名なムルウを知らないのか？それと名
前が・・・かみさかよしや？とても長くて変な名だな。他の国の者

か・・・？

「お前・・・ムルウを知らないのか？ あんな有名な化物を？」
そう聞いてみた。

結構長い沈黙のあと少年は口を開いた

「ほへー・・・ムルウって言うんですね・・・とても自分は小さい村で育ったのであまりそういう知識がなくて・・・」

・・・嘘かな？ 嘘だな、声に少し震えがある。

「ふうん・・・」

と少し見透かすように自分は言ってみた

・・・目を少しズラしてるな。じゃあ嘘か？

「ならば・・・お前の村はなんて名前だ？」

コレならどうだ？

「・・・・・・・・小さすぎて村の名前なんてないと思いましたけど？」

少し笑ってるけど引きつってるな。

自分はフツと笑ってみる。

「・・・・・・・・小さすぎて村の名前なんてないと思いましたけど？」

コレ又長い沈黙なこと・・・

・・・意地悪でもしてみるか。

「ほう・・・名前がない・・・ねえ？・・・嘘だな」

自分はそう言ってみるが・・・結構嘘だ。この国には結構名前のない村があったりもする。

もしこいつがこの国のやつだったらこれはしってるんじゃないかな？
「え？」

そんな引きつった顔をしながら少年はそう答えた・・・かかったな
「我らが王国はもし村を作るなら絶対に王都へ貢物や金を持っていなくてはいかない。それに・・・名前の無い村・・・あり得ないんだなあ・・・王都には村の名前を載せた帳簿がある・・・もしかしてお前・・・他の国から来たのか？」

一気に畳み掛ける・・・

「・・・・・・・・」

少年完璧な無言。当たってるのか・・・？

「ふうん・・・ならとりあえず・・・陣に連れていくぞ」

と俺は結構後ろの方にセットされているオリを親指で差した。

「あのー・・・自分の身の安全は確保されるので？」

そう不安そうに話しかけてきた・・・どうなんだろうな？・・・

たしか不法入国者ならば・・・

理由を問わず何かの刑に処されるのではなかったか？

「・・・・・・・・どうだろうな？すべては主君にまかせてあるのでね・・・
・・・運が悪ければ・・・首でも落とされるんじゃないかね？」

そう答えた。・・・まあ不法入国ぐらいではそんなことはないだろうが・・・・・・・・

コイツくらいの力を持った奴が仲間にはいるなら・・・牽制にはなるだろう。

だが・・・まずは本陣の姫に見せなくてはいけないから・・・ま
ずはそっからだな

とりあえず・・・・・・・・

「とりあえず・・・捕まえろ！！」

捕まえなくてはなんにもならん！！

周りの兵たちをけしかける・・・コレで捕まらない奴はいなかったな。

・・・少し気を緩ませていたら

「ジャッジメントですの」

フッ！

「な！？」

驚いた・・・目の前から奴が消えた！？

俺は瞬時に周りを確認・・・後ろか！？

奴は走り出した・・・と思ったら

「走りながらの・・・武器召喚！チャクラム！」

！？武器を出した！？何もなかったのに！？？

と呆気にとられていたら

「燃えろ！！！」

と持っている丸い輪っかのようなものを自分たちの方に向けた

「（攻撃魔法か？！）」

と思い自分は少し身構えた・・・

火の魔法は基本的に一直線に飛ぶはず！と左右に動けるようにしていた、・・・全員が。

ゴオオオオオ！！！！

コレ又ビックリ。火は15オリぐらいの高さになりこちらに花を燃やしながらこっちに迫ってきた。

「うわあああ！！！！！」

「なんだ！？」

「危ない迫ってくるぞ！？！」

と兵士達が口々に叫んだりしている。

「フラッシュ！！！」

又少年が叫んだ・・・

ダッ！！！！

「？！」

とんでもない速さで走りやがった！？なにか・・・あいつが何人もいるみたいに見える！？

「あ！！！！マテコラ！！！！」

と叫ぶ。

「待つもんか！！！！！！！！！！」

大音量で叫び森の中にもものすごい勢いで走っていった
・・・やばい！

「おい！！早く追っかけろ！！そっちは本陣だ！姫様も居る！」

とあいつが走っていた方へ自分たちも走りだした。

「くっ！・・・」

俺は走っている、後ろにいるみんなも走っている。

「クソ！！どんだけ速いんだ！！？」

「文句を言わないでください！」

と後ろにいる兵士が叫ぶ・・・

「すまん！」

自分はそう言い答えた・・・しかし本当に速いのだ・・・自分も結構速いと思ったが一向に追いつけない！！

「急げ！！」

自分はそう叫び急がせた・・・その理由？それは姫様のことだ。姫様と言えはもちろんこの国の王女である。

名はエリオーシュ・ペテログリフ・ヴァン・モイスト・・・長い名前だ。

何故姫様がこんな場所に来ているのかって？それは後でだ！！

今は姫様の安全だ！！もし怪我をしていたら俺・・・いや俺たちがなくなってしまう。

「おい！？」

「は、はい？！」

と走りながらの受け答え。

「本陣はどの辺だった！？」

「このあたりで大きな池があるところのすぐです！！」

「よし！！このあたりだな！？急げ、もう少しだ！！！！」

と一気に後ろまで届くように大声で叫んだ。

バシャ！バシャ！バシャ！

と水を踏む音がする・・・もう少しか！？

「あ、アレ！！」

「あ！？」

「姫様です！！池の・・・ぎりぎりで誰かといいます！！・・・あ
！！・・・あの少年です！！！！」

「！！」

これはヤバイ！！大変なことになる！

「どうなってる！？」

走りながらもそういった

「・・・戦ってます！」

「はあ！！？戦ってます！？なんじゃそれ！？」

戦ってます・・・コレはとてもヤバイ！

「それで！どうなった！？」

「・・・あっ！！」

目を凝らし・・・驚きの声を上げた。

「どうした！？」

「姫様倒されました！」

「何い！！？」

本当にやばい！怪我でもあったら・・・！！・・・

「姫様！！！！」

ブンブンと手を振って応答を求める。あ、応答あり！！

「行くぞ！！！！」

くエリオーシュく

「ふう．．．なんだったのでしょうか？」

私は驚きの声を上げた．．．

目の前には真っ黒い服を着た．．．少年が倒れている．．．
少し．．．．．思い出してみますか．．．

「ふう．．．．．」

ジャバァ．．．

私は池に入った．．．池といってもとても大きいので湖といってもいいのではないでしょうか？

池にはいる．．．コレはまあ．．．水浴びとでも言うのでしょうか？

本当に無理を言って狩りに着いてきましたが．．．こんな池があるなんて嬉しい誤算でした。

本当は駄目なのでしょうけど見張りを遠くに置いて今は私だけがこの池にいるって感じです。

．．．．．ずっと見張られてても疲れますからね。

潜ったり水を飛ばしたりして少し遊ぶ．．．すると

「がっば！！！」

「！？」

私はそんな声が聞こえた方を振り向いた．．．まさか兵でも溺れた．．．？いやでも池には近づくなどいつていますので違うと思います
が．．．．

まさか．．．魔物？

と私はすぐに逃げ出せる用意をしておく．．．

「ゴッホ！！！！ゴホゴホ．．．ガハッ！！！！」

「！？」

「……誰かが出てきた……男の子？」

「とりあえずテントに……！」

「ジャバツ！」

「と水を蹴りテントに走っていく……」

「バサッ」

「と布をあけ中に入る」

「……」

「無言で一気に服を着る」

「さっと体を拭いたが髪が濡れているけど……仕方ない！」

「バサッ！」

「と勢い良く布をめくると……男の子が上がってきていた。」

「今の格好は肌着に長いズボンを履いている……こんな格好城では出来ないからね……しかも動きやすい。」

「……」

「男の子は無言でこっちを凝視してくる……男の子の格好は上下真っ黒い服……だけだった」

「しかし上の服には金のボタンが付いている……」

「（この子は……王族？）」

「とそんなことを考えていたらふっとこんなことが頭によぎった……まさか……水浴びを見られていた？」

「急に顔が赤くなったかもしれない。」

「私は無言で男の子を見る……」

「……あなた」

「！……ハイ？何で御座いましょう？」

「男の子に声をかけると彼は声を裏返して答えてきた……驚いたのかな」

「……見ましたか？」

「と近寄りながら……確実に仕留められる距離に近づく」

「どうなのでしょう？」

「……見ましたか？見たんですか！？」

と語尾を強めて言う・・・すると

「えー・・・あの・・・」

と目を逸らしながらそう答えてくる・・・

「どっちですか?!」

「はい! ちよつとだけ!」

・・・ちよつとだけ? 見た物は見たのか・・・そうか、そうですか・・・

少し私の中で黒いものが渦巻いてくる・・・

「・・・」

男の子は無言で少し引きつった顔でこっちを見てきた

「あのー・・・もしもし?」

そんなことを言われても私は知らない・・・

私は右足を少しずつ上に上げた

「・・・?」

と男の子は少しまゆを潜めた・・・

私の頭の中はこの言葉のみ・・・『制裁』

「ふっ!!」

と私は少年の頭目がけてハイキック。これで倒れなかった人は今のところは・・・いない一人を覗いて。

「っわ!!」

(え!?)

私は驚愕した私のハイキック・・・しゃがんで避けた?!

しかしそれを表情には出さず次の行動に移す。

「っや!!」

ハイキックの反動を利用した左回し蹴り・・・これでどうですか!?

「っほ!」

コレ又避けられた!?

スッと身を引いてすぐにあの子が踏み込んできた

「ぜりゃあ!」

「っふ!!」

左足での前蹴り・・・それを左に跳んで避ける。

その後、二人とも一気に距離を取る・・・

瞬間すぐに踏み込む・・・

「!？」

少年は驚いている・・・これなら!

「せい!」

ガン!

渾身の肘鉄・・・

「つくゝ!」

少年はそれを両腕をくっつけガードした。

(完璧に鳩尾を狙ったはず・・・!それに反応!?)

その時にすこし隙ができてしまった

「ぜりゃあ!」

私の顔を狙ったパンチ・・・!

「つく・・・」

避けられない!

と思った瞬間、拳は顔に当たろうとしていた・・・

「!？」

私はひるんだ・・・それはグーにしていた拳をパーにされて視界がなくなつたため。

「うっ?!」

そんな声が出てしまった・・・これでは・・・!

「っだあ!」

ガッ!!

「はっが!!」

ズザア・・・

気がそれていたので完璧に蹴りを横のお腹に当たる・・・『痛い』
この言葉が頭に浮かんた・・・
しかしここで倒れたら・・・!

「・・・・・・・・」

無言でとっさに距離を取った

そして痛む所をして次の技へ・・・・・・・・！・・・・

「せいっ！」

この技？コレは・・・・かかと落としですね。

「うぐおお！？」

ドゴオ！！！！

避けられた！？と思ったのは既に遅し。

足が地面に埋まり動けない・・・・・・・・

少年がとても速く回りこんで私の首に手を回してきた・・・・・・・・！！・・・

「よしっしょ！！」

そんな少し抜けた声が聞こえ、しかしとても軽くない音がした
ズダン！

「くっ！」

地面にたたきつけられ身動きができなくなった。

「よいしょ・・・・・・・・オレの勝ち！」

と完璧に抑えつけられ子供が喜ぶような声が出していた

「・・・・・・・・つく・・・・・・・・」

逃げようとしてみる、すると

「え？」

私はそんな声が出た・・・・・・・・だってとても有利な体勢だったのに体を
離したのだ・・・・・・・・

少年は立ち上がって

「ふふ・・・・・・・・ああ？」

とても満足したようにほほえみ急に体勢を崩した・・・・・・・・え？

「っが！！」

バチャ！

と音を出し倒れこんだ・・・・・・・・

「え？」

と私は立ち上がり倒れた少年を見ていた・・・・・・・・

「ふう・・・なんだったんでしょう?」

そう呟いた瞬間

「姫様く!!!!!!」

と言う声が聞こえ手をぶんぶんと振っていたのでこちらも手を上げて答える・・・

「やあつと・・・着いた・・・」

とぜえぜえと声をだし膝に手を当てていた

「どうしたんですか?」

と何事もなかったように答える

「どうしたんじゃ・・・ない・・・ですよ・・・」

と途切れ途切れの声で答えてきた。

「ふうう・・・」

深呼吸をし一呼吸起き、

「そいつですよ!!」

と声を荒らげてそういった。

「?・・・この人がなにか?」

と少し驚いてみる

「それよりもお怪我は!?」

とまた荒らげて言ってくる

「・・・ゼル・・・大丈夫ですから・・・」

「!・・・分かりました」

と少しビクッとしてそういった

「それで・・・その人がどうかしたんですか?」

と疑問をぶつけてみた。

「あ、そうでした・・・こいつはムルウを何らかの魔法で一瞬で消したり、フツ飛ばしたり！、パツと居なくなっただし、何らかの魔法を使っただですよ！」

「!？」

と驚いた。

私の認識が正しければ・・・ムルウは軍でなければ倒せなかったはず・・・

それをたった一人で？すごい・・・

そんな事を考えていたら

「姫様！」

と言ってきた・・・

「ゼル・・・」

と何か訴えたい目で見てみる・・・

「・・・分かりました・・・エリー様」

「それでよし・・・何でそれで呼んでくれないのですか？」

彼は少しの無言をとった

「いや・・・この呼び方が染みこんでしまっただけ・・・」

と頭を掻きながら答える

「まあいいです！で！この少年はどうするんですか？」

と率直に言ってみた

「ああ・・・オリに入れておこうともいます。・・・こんな奴にオリは無意味かもしれませんが・・・」

と目を伏せて答えた・・・

「そうですか・・・」

と語尾を弱くして言っただけ

「おい！！！！急いでオリに連れていけ！！！」

と兵たちに叫んでいた・・・

・・・兵たちすぐに来ましたよ・・・

「よし・・・持って行け！」

「は、はい！」

と二人の兵士は少年の腕を持ち引きずっていった・・・ゼルもついて行った・・・

そんな後ろ姿をみてエリオーシュはこう思った

面白い事が起きそうですね・・・

そんなことを考えてすぐにエリオーシュはゼル達の後について行った・・・

逃走劇、あっちサイド。(後書き)

コレ又疲れた・・・

檻の中・・・からの出発！

（義也）

「・・・ん？・・・は？」

自分は目を覚ましたようだ・・・そして硬直した

・・・なんでエ自分はア檻の中にいるのでしょうか？！え！？自分何かした！？

・・・状況整理してみましよう。

現在・・・森の中にポツカリと開いたような所の隅っぽい所の檻の中に居ります・・・自分が見てる方を少し右にずらすと・・・キヤンプファイアーですそれを囲んで色んな人達がガヤガヤとしています・・・寂しい・・・

あ、キャンプですか・・・楽しそうだなー・・・

えー左手にー見えますのが何かこう・・・少しでっかいテント・・・と言っているのかは知らないがそんな・・・いいやテントで・・・

「あ？・・・夜か」

と檻の中から見える景色が暗かったので夜と判明。

「おお・・・結構広いな・・・この檻・・・」

今気づいた・・・結構大きかったなこの檻・・・

縦が俺2人分くらいで横が俺2人分くらい・・・高さは・・・俺の身長すれすれぐらいかな・・・？

と寝たり立ったりして測ってみた・・・すると

「おう・・・やっと起きたか坊主」

何時間前位に捕まりかけた・・・って言うより捕まえようとした男の人・・・声は・・・渋くはないけど中学生ぐらいでもない・・・何歳だろうか？

格好はともうフな格好だな・・・黒髪で整った顔とタンクトップみたいなのと長いズボン・・・

流行りなのか？

「・・・あのう・・・ここはどこですか？」

とりあえず情報収集。

「いきなり質問かよ・・・まあいい・・・ここは今回の狩りをするための拠点だ」

少し嫌そうな顔をしたがパツと答えてくれた・・・拠点？ああ・・・

「・・・何故に自分は捕まっておるのですか」

「何故って・・・お前知らないのかあの人を？」

「あの人・・・どの御人で？」

といった瞬間ため息をつかれた・・・え？

「あの一あの人というのはもしかや僕が殴り合っていた人で？」

そう言い切った瞬間あの方は驚愕の顔をした・・・え？

「お前・・・もう知らないぞ・・・」

とくるつと方向を変えてキャンプファイアーの方に歩いて行きそう
だ・・・！

「ああ一寸待って！！」

「・・・何だ？」

と露骨に嫌そうな表情・・・

「その人って誰なんですか？！」

と檻の鉄らしき棒に捕まり逃がすもんかと聞いてみる

「本当に知らないんだな・・・じゃあしつかりといってやるから良
く聞けよ・・・」

と長い沈黙の後こう言った

「あの人エリオーシュ・ペテログリフ・ヴァン・モイスト・・・
我がペテログリフ王国の・・・第一王女様だ」
・・・え？

思考回路が追いつかない・・・は？えーと・・・自分が殴り合
った人が王女様？

いやいや・・・そんなわけないって・・・ねえ？

「え・・・王女様？」

「そう・・・王女様だ。」

「もしかして自分はとても大変な事をしてしまったので？」

「ああ・・・そのとおりだ。多分・・・都に着いたら・・・首が飛ぶのではないのか？」

サラッと言い放ちやがった！！やばいよ・・・打首獄門だよ・・・いや・・・実質もう・・・1回は死んでると思う・・・地球ではね・・・ココでも死ねるか？

「とりあえず・・・都には一日は掛かるから・・・祈っておけば？まあ・・・助かるものでもないとは思うがな・・・」

と言ってキャンプファイアーの方に歩いていった・・・

マジかよ・・・神様そんな事ってありですか？

と空をみて自分はそんなことを思った・・・

もう限界だ・・・

ギュルルル・・・

腹から異様な音・・・コレは腹の虫です。

「は・・・腹がっ・・・！」

と腹を抑えながら膝について頭を床につける・・・はい、空腹のポーズ。

「おおおお・・・」

徐々に声にも元気がなくなつてさらに膝がズルズルと滑りうつ伏せになつていく・・・

「・・・・・・・・」

腹から手を退かし横に伸ばす・・・そして膝を倒し大の字になった。
「ああ・・・もうダメだ・・・もう何も出来ない・・・何もやりたくない・・・」

とブツブツと呟く・・・本当は半日位食ってないだけこんなになるのかは謎であるがとてもお腹が空いた・・・アレエ・・・地球ではこんなことはなかったのに・・・ん？
と考え目から軽く涙が流れる・・・ん？
ツザ・・・ツザ・・・

何かな幻聴かな？何かが聞こえる・・・あ、そうかしきしてお迎えですか・・・今なら大歓迎です。

コンコン・・・・・・・・

「ああ・・・・・・・・幻聴が聞こえる・・・あははは・・・・・・・・」
一寸おかしくなったかな？

「ちょっと！すいません・・・・・・・・」

ん・・・・・・・・女の人の声？

「ん？・・・・・・・・あ」

むくつと顔を持ち上げそんな声が聞こえた方を見た。

「どうかしましたか？王女様？」

そんな事を言ってみた

「・・・・・・・・お腹空きませんか？」

多少の沈黙の後そう聞かれた・・・え？

「はい、空きましたよ・・・・・・・・空きました・・・お腹が減りすぎて少しぶっ壊れてきましたよ・・・・・・・・」

と事実を述べてみる・・・

「大丈夫ですか・・・・・・・・少ないですがコレ・・・食べます？」

と何かの実・・・・・・・・少し黒っぽいのを3つさし出してきた・・・

「なんていう種類ですか？」

お腹が限界だが疑問がでたら聞く・・・

「プレルの実です・・・美味しいんですよ？はい！」

「おっと・・・それでは頂きます・・・」

と手渡しされた実を意を決し食べてみた

「・・・」

目を固く瞑り噛む・・・

ん・・・なんて言えはいんだ？あー・・・食感はイチゴで味は・・・何だ？オレンジか？

とりあえず美味しい。

「う・・・美味しいです・・・とても」

と少しまた涙が出た

「涙を流してまで・・・まあ・・・よかったです！・・・あ、もう食べちゃった。」

と嬉しそうに答えてくれた・・・後に俺の食いっぷりを見て少し驚いたようだ

「・・・ふう・・・ご馳走さまでした・・・っと」

と思った事を述べてみる・・・そして立ち上がって女の人の方を見る・・・

格好は・・・半日前ぐらいとはちょっと違いフード付きのマントを着ていてちらっと見たのは半日前の格好・・・しかし顔は見えていてほえみながらこつちを見ている・・・

「ずいぶんと簡素な格好をしていますね」

と率直に思ったことを言ってみた

「コレですか？・・・ないしょで来ているのでバレないようにと・・・」

「？誰にですか？」

「旅人・・・とかこの国の民などにです・・・バレちゃったら大事ですから・・・」

とコレ又ほえみながら聞いてくる・・・

「・・・あなたお名前は？」

・・・これに答えて損はないだろう。

「ああ・・・自分の名前は上坂義也です・・・現在進行形で13歳

ですね」

と少し余計なこともいれて答えた。

「え?! その身長で13歳ですか! ? すごいですね……
それと名前はカミサカヨシヤ……ですか? 長いですね……」
とクスクスと笑っている……

間違えを正さねば……

「ああ……名前はヨシヤの方です……それと完璧に失礼と存
じ上げますが聞きたいことがあります」

と挙手をして言ってみた

「はい、ヨシヤ君」

と差してくれた……ノリのわかる良い人だ……

「先に謝っておきますがすいませんでした……それでは聞きます……今何歳で御座いますか? 」

……完璧ビックリ顔……反応が面白い人だなあ……

「え! ? 言わないとだめですか? 」

と少し顔を強ばらせてきた

「いやいや! ただ聞いてみただけです……すいませんでした」
と深々と一瞬にして土下座。

「顔を上げて下さい……17です……」

「おお……ありがとうございます……」

とふざけ気味に言ってみた……

「ふふっ……」

とほえんでから最後方は何かボソッといっていたな? ……聞き取れなんだ。

「それでは見つかってしまうと大変なので……」
と去っていった

「ありがとう……」

そう言って檻の中で横になった……

ガラガラガラガラ．．．．．

「ん？ふあああ．．．．」

と目を覚ました俺は周りを見てみた．．．朝っばいね．．．お、遠くにお花畑が見える．．．

「おお．．．」

と驚きの声を上げる俺．．．この檻って動いたのね．．．車輪でも付いているのかな？前に馬っぽいものに引かれている．．．楽チンだね。

「ん．．．．何処だ？」

と目を凝らし更にみてみた．．．街道．．．なのかな？道が整備されてるっばいね。

とキョロキョロしていたら

「よう．．．お目覚めか？」

．．．横から声が聞こえてきたので横の方を見てみる．．．マリモ頭の男がいる．．．まあ．．．あえてそこは言わないでおこう。

「お前．．．いや．．．そんな訳ないな。こんなガキが．．．」
「ああ？」

自分の中で少し強めの声で反論してみた

「お前があのもルウを倒したって？馬鹿馬鹿しい．．．」

「そんな事言える根拠でもあるのか？」

．．．．そのもルウとやらを消したのは俺だが．．．

「できるはずねえよ・・・こんなガキが・・・軍一つ動かさなきや倒せない化物をこんなガキが？隊長の嘘は大概にして欲しいぜ・・・」

そうほくそ笑みながらこっちを見下してくる・・・むかつくなあ・・・もう・・・

・・・多分コイツの言動からすると隊長とやらは俺の一部始終をみていたのかな？そしてこいつは見えていないと思う。

「・・・消されたいか？」

と低い声でいってみる・・・前の俺だったならば無理かもしれないがいまはこんな力がある。

「消す？俺をか？・・・ムリムリ。」

と残念だったなどでもないたげな顔でこっちを見下してきた。

「仕方ないな・・・腕一本飛ばすぞ？」

「やってみな？その檻の中から出来るのならな？」

そう言ってスッと右腕を檻の前に差し出してきた。

「本当に・・・切り落とすぞ？」

「どうぞ・・・」

・・・むかつくなあ・・・

「じゃあ準備をするので10秒ほどお待ちください・・・」

右手を後ろ手にし召喚してみた。

「タンマウオッチ」

カチッ

押した瞬間、辺り一帯が静止した。

「!?!? 何だ!?!」

マリモ頭はそういつて辺りを見回す。

「じゃあやりますよ・・・『ナイフ』!」

ザシュ!

「うぎゃ!!--!!」

男は短く悲鳴を上げてうずくまった・・・ああ・・・この技は某美食漫画の主人公の技さ。自分の右手を全てくつつけて振り下ろす・

・・・自分は唯これだけの事をしたまで。

漫画では疲れるだろうが・・・能力だし・・・なんか全然疲れない。
と自分は宙を舞ったマリモの右腕を持ち上げた

「ぐうううう・・・」

完璧に痛いだろうね・・・付けるか。

「はあいお立ち願います」

肘から先のないあいつを立たした。

息を落ち着かせ・・・

「『クレイジーダイヤモンド』」

ドッ

と背後から出てきた何かゴテゴテした人が出てきてマリモの右肘辺りを殴った

「!?!」

あいつビックリしてる・・・まあ切れた腕がくつついたんだからね・

・・・これで多少はうるさくなるだろう・・・

とポッケにいれていたタンマウオッチを押した

カチッ

「そして時は動き出す」

格好付けちまったぜ!

周りは動きだした・・・

「うわあああ!!!」

マリモは列の後ろに走っていった。ざまあみさらせ。

自分は満足したので横になろうと檻の床に手を置いた・・・

ズドオン!!!!

「!?!?」

思いっきり飛び上がってしまった・・・だって何処からともなく火の玉が自分の檻のすぐ横に落ちた。

「あぶねえ・・・お?」

と見てみたが驚き。檻溶けてる。出れるじゃん!

「よいしょ！」

タッ！

地面におりた・・・

辺りを見回してみる・・・やばくね？

自分たちは街道っぽい所の真ん中を行っていた・・・何故か見晴らしのよいところで囲まれている・・・

「急げ！！」

「戦いの準備だ！！」

「姫様をお守りしろ！！！」

そんな声が聞こえてくる・・・

チャンス！この機を逃すわけにはいかない！

コレで選択を間違わなければ俺助かるはず！

「隊の皆さん！！動かないでください！！」

そう叫んだ。いっちゃいってみますか！

「よし！！あなた方は攻撃してきたため敵と見なします！！！」
とそういったすぐに後ろの黒髪の自分をとっ捕まえたであろう人に話をする

「あいつら・・・敵か？」

「お前！？・・・ああ敵だ・・・しかしお前は引っ込んでろ！」

「ん・・・それは無理ですね・・・恩を売ってくれた人を守りたいですからね」

「・・・姫様か・・・もういいわかった・・・手伝ってくれ！」

ようし！！了解は得られた！！いっちょ行きますか・・・

「・・・『モード・・・コール』」

バチィ！！

体から電気を放出する・・・コレ又解説。コレは某電気を主な攻撃としたゲームの主人公を真似てみました。

「ん・・・」

自分に向かって飛んでくる火の玉・・・もしこの能力が使えるのなら・・・

「ショックウェーブ!!」

手を内側から外側に向かって振る・・・

・・・おおうマジで跳ね返った・・・便利だな・・・

コレは勝機! ドンドン行きましょう!!

自分は手を高くあげ一気に振り下ろしてこう叫んだ

「皆さん隠れて!! 『ライトニングストーム』!!!!!!」

一瞬で空は黒くなり・・・

ダダダダ!!!!!!

と雷を連続して落とす・・・何とまあ危ない攻撃なこと・・・

多少威力の軽減は出来ると思うから・・・なるべく弱くを意識して

やったんだが・・・まあ大丈夫っしょ。

「・・・このくらいか・・・」

と技を止める・・・そしたら一瞬で黒い雲は消えた・・・

辺りを見回してみる・・・お・・・味方に被害なし。おおう。

多分雷は意識してやったからこの隊には当たらなかったのかな? よ

くわからへんわぁ・・・

・・・視線が痛い。

何か隊の人達がみんなしてこっち見てる・・・あ、姫様とか黒髪

までこっちみてる・・・

「あ、危ねぇ!!!!」

俺は叫んだ。

だって姫様がこっち見てる間に後ろからまだ・・・気絶でいいのか?
・・・気絶をしていない軽装な男が姫様に向かって走ってる・・・
それだけならまだいいと思う。しかし剣を構えてきてるのは頂けない。

(くそ!!! 間に合え!!!)

と自分はダッシュして向かう・・・見た感じ姫様の周りには、兵が
いたっぽいが自分の方をみてまだ固まっている。それと列の周りに
広がっている兵たちは俺の声に反応して向かおうとしているが遅い。
クソ!!! 能力を使うか!?

「『フラッシュ』!!!」

ダッ!

と能力を使って一気に姫様の方に走る……

(行けるか!?)

能力をやめ一気にスライディング……学生服が大変なことになりそうだな……仕方ないか……

ズザアア……

と振り下ろされそうになった剣の先には姫様……ではなくギリギリにスライディングをして滑り込めた俺が居る。

その時、あ、俺甲子園行くんじゃね? と思ったがその考えを捨てスライディングをしていた瞬間に召喚していた『ガンブレード』で軽装な男の剣を止めた……ぎりぎりセーフ……ガキン!!

そんな金属音……男はビックリしてるっぽい……まあそうだろうね……

でも……勝機!

とガンブレードのトリガーに指を引っ掛けた。

ドオン!

と剣先から爆発が起きた……ビックリした。本当に出来たことより男がすごいぶっ飛んだのに驚いた。

「やっべ!」

とぶっ飛んだ男の方にすぐ走った

「よし……『ケアル』」

パアア……

と光が男を包んで……回復させたんじゃないかな?

「……終わったかな?」

辺りを見回す……居るのは味方……倒れてるのが敵……でいいのかな……

「よし……」

自分は姫様に向かって歩き出した。

そして姫様の前に行き手を差し伸べて・・・

「大丈夫ですか？」

と今の自分ができる優しい顔でそう言ってみた。

檻の中・・・からの出発！（後書き）

目
が
あ
あ
．
．
．
．

どうしてこうなった？ (前編) (前書き)

1000PV超えました！それとユニークが300超えまして！

どうしてこうなった？ (前編)

．．．．．どうしてこうなった？

．．．．．確か．．．姫様を助けて．．．手を差し伸べて．．．
檻に戻って．．．アレ？

．．．何をどうしたら．．．姫様と同じ．．．馬車らしきものに
乗るんだ？．．．

何で黒髪も乗ってるんだ？．．．

「．．．．．」

ガタガタ揺れる馬車の中自分は座っている．．．それならいいん
だ。本当に．．．

「．．．．．」

自分は座りながら目を瞑っている．．．何故かって？それは．．．
あれだ。

二人が．．．こっちを凝視してきたからなのさ！

「．．．．．」

チラッと目を開けてみる．．．まだやってる．．．

ええーと．．．姫様が向かい側に座って．．．黒髪さんが．．．
隣に座っているのだが．．．

二人してーじいーっとこっちを一回も目を逸らさずに見てくる．．．

・

どうしてこうなった？

．．．．．思い出してみるか？

「大丈夫ですか？」

と自分は姫様に手を差し伸べる……

「……あ、はい……大丈夫です……ありがとうございます……
……よいしょ……」

ヒョイ

「ふう……」

姫様が差し出した手に捕まったので引っ張り上げた……

「……あなたは……何者なのですか？」

「……いきなりの質問だこと……」

「さあ……多分そうだな……普通の……人間でございま
すよ……13歳のね。」

少し時間を置いてそう答えた……

「……ニンゲン？……ですか？」

「……姫様軽く首を傾げて考えてる……はて？」

「もしかしますと……あなた様は人間じゃないので？」

疑問をぶつけてみる……

「はい……私はホーク族です。」

「……ホーク……ああ……鷹の事か……」

ビックリした……え？ここと地球じゃないのよね？ホーク……
コレって英語ではないので？

「……？？」

ここで疑問が湧いたぜ。

「……姫様？もしかして……飛べます？」

「え……はい、まあ……飛べないことはありませんが……

普段は使わないのです」

「何故ですか？空飛べたら楽しいじゃないので？」

自分は疑問形で又問いかける……

「まあ・・・楽しいですけど・・・痛くなるんですよ・・・付け根が・・・」

・・・うっわ・・・カワイー・・・恥ずかしそうに言うのカワイー・・・反応おもしれー・・・

「ん？でも・・・生えてくないですか？翼・・・」

背中に回りこんでみる・・・うん、痕跡なし。

「コレは魔法です！！魔法を使って変化させてるんです！！」

とすぐさまバツと後ろを向いて見てる自分に背を見せないようにしてる・・・

「・・・ちえー・・・あ、乗らなくていいので？馬車に。」

指を馬車の方に向けて問いかける・・・

「はい！の、乗りますよ！」

とそそくさと馬車の方に行ってしまった・・・

「あ、黒髪がいたな・・・」

黒髪の方に行ってみる・・・

「やっほー」

「あ、・・・お前か」

と無愛想に言うてくれる・・・

「お前、こいつらを殺したのか？」

・・・うーん・・・どうなんだろう？

「多分・・・殺してないです。って言うか殺したくないです。」

「本当か？！殺してないんだな！」

・・・急に元気になったよ、この人。

「ありがとう・・・コレで尋問が出来るな！！」

「尋問するんですか？」

聞いてみる・・・

「おうよ。王族に手を出したんだ・・・何か理由があったんだろうよ」

「ほう・・・楽しそうだな・・・あ、縛ります?」

と尋問に必要ありそうな道具を取り出しながら言ってみる・・・

あ、コレはアレです・・・何か・・・内ポケットに入っていました・・・
・すずらんテープです。・・・全然違和感なかったよ・・・

「ああ・・・お前それ何処から出した?」

「え? コレはアレです・・・この上着の内ポケットに・・・ああ!
!!」

と言った瞬間

周りにいた兵士の人たちがこっちをビックリして向いた。

「あ、なんでもないんで! すいませんでした!」

と少し声を張り上げる・・・っと

「・・・どうかしたのか? そんな大声を出して?」

首を傾げて聞いてくる・・・

そう言われた自分は・・・この世界でまだした事のない自分が出る最大限の悪人顔をした・・・

「ああ・・・何故かって? よく聞いてくれました・・・コレですよ。」

と自分は着ている学生服の右側を振り向いて見せる・・・

「・・・とても大きな・・・穴が開いてるぞ。」

「そうさ! 穴があいてしまったのさ! と言う事で自分に尋問をやらせてください!」

とズイと顔を近づけパンっとすずらんテープを少し出して引っ張る。

「え・・・ああ・・・わかった・・・」

多分気迫に押されて了解してくれた・・・ん? 態度が砕けたな・・・
・いいことだ。

「ありがとさん・・・っと」

グルグルグル・・・

「はい、縛るの完了!」

と黒い笑みを浮かべふうと息を付いた。

縛った人は三十人くらいです・・・

5人ずつ縛っておいたぜ！プラス腕も縛って。

「よし・・・起こしていい？」

「え、ああ・・・いいぞ。」

と一瞬の間のあとそういった・・・よし・・・

「起きてくださーい」

ペチペチ・・・

と一番前の自分の方を向いている人を起こしてみる・・・戦士タ
イプっぽい人だな

「ん・・・ああ？」

「起きましたか？」

男は少しキョロキョロしてから自分のほうを見た

「おい！！コレを外せ！」

肩を動かして外そうとしてる・・・

「ああ・・・無理っすよそれは外れないです」

こんな男ですら外せないすずらんテープ・・・最強だな。

「・・・率直に聞きますよ・・・何故この列を襲った？」

最初はいつものゆるーい口調で後半は思いつき悪を込めた低い声
で言ってみる

「それは言えないぞ！！」

男はそっぽ向いちゃった

「言えよ・・・じゃないと・・・消すぞ？」

今度は明るく決めの一言。

「消せるもんなら消してみろってんだ！消したら聞き出せなくなる
ぞ！！」

自分がしゃべらなければ安全・・・そう思ってたのかな？

「しゃあないな・・・じゃあ見せるよ。『ザ・ハンド』」

音もなく何か守護霊的なまたゴテゴテした人が出てきてその男の足
の前の地面を削り取る・・・

って言うか・・・消した。

「・・・」

目を見開いてそこを凝視してる・・・まあビツクリだわな。

「もう一度言うよ？しゃべらないなら・・・消す。」

自分が出せる最大限の低い声で言ってみる

「言わんぞ！！絶対だ！！」

「ほう・・・別の方法でやられたいか・・・そうかそうか・・・
・じゃあ・・・コレならどうかな？」

ズドン！！！！

・・・フシュと煙が出る・・・あ、これ？さっきの一瞬の間に出した銃です。何故か反動一切なしの・・・ジャッカルだよ・・・コレ39センチの化物ハンドガンです。漫画いわく人間には扱えないって言ってました。・・・できちゃったけど・・・あ、弾は何か出なかったよ。

でも地面にもものすごい穴が開いた・・・

「・・・」

又目を見開いてる・・・

「まだ・・・言わない？撃っちゃうよ？」

カチャ・・・

額にジャッカルを当てる・・・

「カウントします。5・・・4・・・3・・・2・・・」

あいつ汗ダラダラ・・・言うかな？

「いーち・・・」

トリガーに指をかける

「ぜー「わかったから！！！！話すから！！！！」・・・ちえー」

カチャ・・・

銃を下ろす・・・

やっと話す気になったようだ・・・危ない危ない・・・撃ちそうになっちゃったぜ。もし大声出さなければ・・・どうなっていただろうね？

「・・・・・・・・さてっと・・・・・・・・話してくれますか。」

後ろ手でジャッカルを持ってから・・・・・・・・消した。

「はいいい！！！！」

・・・・男の涙目気持ち悪いよーっと

「黒髪さーん・・・・・・・・おい？」

後ろにいた黒髪に話しかける・・・・

「・・・・・・・・話す気になってくれたのか？」

「おう・・・・・・・・後のことよろしく」

スタコラとこの場を去っていく

「おい？何処にいくんだ？」

「何処って・・・・・・・・檻？」

指を檻の方に向けて言ってみる

今現在の檻の様子は側面が溶けてます。もう逃げてくださいと言わんばかりに、はい。

「あ、大丈夫っすよ！逃げませんので。」

「え・・・・・・・・そういう問題では・・・・・・・・」

さーっと小走りで檻に向かう・・・・

「よいせっと・・・・・・・・」

溶けた所を避けて手を置いて登る・・・・

「ふう・・・・・・・・」

と座って中に腰掛ける・・・・左に見えますのが溶けた檻で御座います。

・・・・真ん中から右半分が溶けて下の木のところに垂れてる・・・・木に当たらんなくてよかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

目を瞑り横になって眠る準備をする・・・・まあ死ぬ前に寝とうとうと思ひまして・・・・

「ふああああ・・・・・・・・」

目を瞑ったままの大あくび・・・・・・・・気持ちいいんだわ・・・・コレが

完璧に寝るモードに入ろうとしました・・・

「ん？・・・」

目を開けてみる・・・姫様がこっち来てる？まあ知らんこつたないね・・・

と再び目を閉じる・・・そして少しの間があつて

「あの・・・」

「はいはい・・・起きてますよ姫様？」

と上半身を起こし左を向く・・・やっぱりいた。

「どうかしめたので？ああ・・・逃げないから安心をして下さい。」

そうそっぽ向こうとする

「いえ・・・この檻を使うそうなんで・・・」

「ああ・・・使うんですか、分かりました・・・降りればいいので？」

と又降りて姫様の前に出る・・・

「あー檻直しときますか？」

「は、はい・・・お願いします・・・」

と何か難しい顔してる・・・何故じゃ？

「『クレイジーダイヤモンド』」

ガッ！・・・ふしゅ・・・

「はい・・・直りましたよ・・・」

「あ、ありがとうございます・・・じゃなくて！」

「じゃなくて？」

と聞き返す・・・

「あの・・・もしよかったら馬車乗りませんか？
・・・は？」

「馬車ですか？」

「はい・・・馬車です」

ん・・・試すか。

「もしかしたら馬車に乗った瞬間あなたを捕まえて人質にするかも

しれませんよ？それでもいいので？・・・姫様？」
さあ・・・どうする。

「大丈夫ですよ！あなたは私を助けてくれましたから！」
一瞬で答えてくれました・・・笑顔が眩しい・・・

「はははは・・・分かりました！乗りましたよ。」

「本当ですか？！・・・よかった」
ん？よかった？

「よかった？何がですか？」

「いえ・・・何でもないです・・・では行きましょうか？」

「はーい・・・」

姫様の後について行ってみる・・・何か心なしか嬉しそうだ・・・

「はい、どうぞ？」

と列の先にある馬車に着いた・・・結構でかいな・・・

「おじゃましまーす・・・」

と、扉らしきものを開けた・・・

「おお・・・」

結構広い・・・それに王女ってぐらいだから金ピカしてるかと思
ったらとても質素だった・・・

しかしそれでいて綺麗で高級感がでてた

「どうですか？」

後ろから姫様の声が聞こえる

「・・・かっこいいですね」

と入り口で止まっていたのを完璧に中に入る・・・

「そうですか・・・かっこいいですか・・・」

と何かうれしげな声が聞こえてきた・・・

「とりあえず・・・座ってください。」

「あ、うす。」

と座るところに腰をかけた・・・

「おお・・・すごい柔らかーい。」

と少しグヨグヨしてみる・・・

「ふふ・・・」

と微笑んで反対側に姫様は座った・・・そして間もなく

「姫様！報告に参りました！！」

と黒髪の声。

「そうですか・・・とりあえず中に入ってください」

「ハッ！」

と言って中に入ってくる・・・

「あ！お前！」

「よす。」

「あ！彼を入れたのは私ですから！！」

と一人喧嘩腰に入りそうになった黒髪を姫様が止める・・・

「座ってください・・・」

「・・・分かりました」

といって俺の横へ来た・・・

間もなく馬車が動き出した・・・あの件が片付いたのかな？

ガタガタガタガタ・・・

と馬車の動く音がする・・・ん？

「・・・」

「・・・」

「・・・」

二人して自分のほうを凝視してくる・・・目を瞑っておくか・・・

・・・

・・・

チラッ

目を薄目にする・・・

「・・・」

「・・・」

まだじーつと見てる・・・何が楽しいんだろうか？

まあ・・・時間はあるし・・・もう少し黙ってようか・・・
と自分は思っ目て目を薄目にして様子を見ることにした・・・

どうしてこうなった？

(後編)

「……辛い、とてつもなく辛い！視線が！」

「……」

「……」

薄目を開けてまたみてる……うっわ……

何か……姫様は……こう新しい玩具を買って貰った子供みたい
に自分を見てくる……

黒髪に関しては……俺の身体をくまなく見てる……

「あの……すいません？」

もう耐えられんぞこの視線たちよ……こうなったらこの沈黙を崩
すしかない！

「……は、はい?!」

姫様は……急に声をかけたから飛び上がったぞ。反応無し……
じゃなくて！

「そんなに……自分は珍しいですか？」

疑問をぶつける

「え、あ、いや……そんなつもりでは……」

と下を向いてしまった……

「自分なんてあれですよ？ただの一般市民ですよ？」

まあそれはあつてると……思う。

「……なんか姫様硬直してる……うん？」

「え……あなたはどこかの国の王族ではないのですか？」

は？……王族？なんのこっちゃ？と腕を組んで考えていると

「だってあなた金のボタンをしているでしょう？」

ずっと姫様は自分の学生服を指差して言う

「え……そうなんですか？」

これまた疑問をぶつけてみる

……

金色が王族色？まじでか・・・

「はい、確かに王族しか使っては使ってはいけない色のはずでした
が・・・」

姫様は考えるように左手を口元にやっている・・・

「いえ・・・自分は王族ではありませんよ！？この服は・・・」
全力で否定しかけそうになったが理性が止めてくれた。

だって考えてみようぜ・・・金が王族色なら一般市民がこんな
持っているわけがないじゃないか！

どうする？！

「この服は・・・どうしたんですか？」

聞きたがってるよ？やばくね？・・・

少しの沈黙。

「・・・この服は・・・その、なんと言いますかね・・・」
頭の中で考えがぐるぐる回る、今までにないくらい頭回転してる・・・

・・・そうだ！

「・・・買ったんですよ！商人から！」

これでどうだ！？

自分は目を見て言い切って見せる。

「買ったんですか？・・・そうですか・・・」

と納得したみたい・・・おおう

「私も欲しいですね・・・その服・・・」

と上から下まで興味心身で見てる

「その黒い服に金のボタンに・・・いいなあ・・・」

と大人な感じから何か子供っぽくなった。

「今度・・・探して来てあげますよ？」

取り敢えずつなげておく

「本当ですか！？やった！」

・・・この人ってこんな綺麗なのに子供っぽいところもあるのね・・・

「姫様、次はないかと」

横からの声。黒髪だな・・・

「あ、そうか自分は死刑でしたっけ？」
しらっとしてみる

「え！？そうなんですか！？」

姫様は立ち上がってまでびっくりしてる・・・

「ええ・・・王族に怪我をさせたんですからね・・・」
とちらっとこっちを見て来た

「え？！でも！怪我は治りましたっていうかそんな怪我してませんよ？！」

ずいぶんと熱のこもった反論・・・何故？

「そういうことでももう伝令が王都まで行っちゃってますゆえ・・・それに今更伝令を送ってもどうにもならないかと・・・」
スラスラと答える黒髪。

「あの・・・もう助からないんですか？」

一部の希望を込めて聞いてみる・・・
「・・・助からんこともない・・・」

「本当ですか？」

ずいっと顔を近ずける・・・

「本当だ・・・だが顔をどけろ。姫様も座ってください。」

「あ、はい・・・」

姫様はおずおずと座った。

「じゃ話すぞ？」

と座り直してこっちを向いた

「今のお前には選択肢が二つある・・・
一つがなんの行動も起こさず首を切られるか、だ。
もう一つが・・・大会で勝つことだ。」

「・・・一つ目はいいとして・・・は？聞きまちがいかな？大会？」

「ちょっと待ってください．．．大会って言いました？」

「ああ、言ったぞ？」

疑問の顔でこっちをみてる．．．

「あ、でも！それって！」

姫様が話に乗って来た．．．それ？

「はい．．．あれです。」

そういった瞬間姫の顔が蒼くなった．．．なんで？

「あの．．．話について行けないんですが？」

多分この時の顔は引きつってたと思う

「そうか．．．では話そう．．．いや、先に聞いておこう．．．
どちらを選ぶ？」

急な選択肢問題かよ．．．しかし絶対に死にたくないぜ！

「出ますよ？死にたくはありませんからね！」

胸を張ってそう答える．．．

「はあ．．．本当にいいんだな？後悔．．．しないな？」

ため息疲れた上心配されてる？

「はい．．．しませんよ、生きるためですから？」

「やめてください！死んじゃいます！」

答えた瞬間姫様からやめての声が．．．死んじゃう？

「大丈夫ですって．．．」

なだめておく．．．

「本当にいいんだな？もう伝令飛ばしちまうぞ？」

．．．じれったい．．．

「じれったいです、やりますって言ってるでしょ！」

じれったくなってる言った

「わかった．．．待ってろ．．．失礼します．．．」

キィ．．．ボタン

扉を開けて外に出て行ったぞ、黒髪。

．．．ん？

「姫様？どうしました？そんな．．．え？」

出て行く黒髪を見ていたら姫様がこっちをみていたので聞いて、振り返ったら・・・

「・・・・・・・・」

無言で・・・泣いてるんだぜ？何故だ？

「ど、どうしたんですか？何故泣いてるんですか？！」

自分は慌てて姫様が座っている方の場所に移動した

「・・・ひっく・・・うう・・・」

やばいぞ、なんだか知らんがマジ泣きだ・・・？

「どうしたんですか！？」

本気で慌てる。自分は女の子泣かしたことないからわからん・・・
・どうすりゃぁいい？！

「だって・・・しんでしまうかも・・・しれないですよ？」
少し途切れ途切れになって答えてくれた・・・同情か？

「大丈夫ですって・・・」

何がなんだかわからなくなったので・・・その、あれだ・・・後ろから肩に手を廻した・・・

あれ？これなんだっけ？こうなりやヤケだ！

ポンポン・・・

「大丈夫ですから・・・」

肩をゆっくり手首を使って叩く・・・確かこんな風にされた覚えがあるな・・・ガキの頃に・・・

「ひっく・・・」

まだか・・・もうちょいやるか・・・

ポンポン・・・

またやる。やり方かどうか知らんが、これでいいのか？

「大丈夫です・・・大丈夫ですって・・・」

なだめていく・・・ゆっくりと・・・

「・・・ふふっ・・・」

「あ、笑ってくれましたね・・・」

あ、安心したぜ・・・

「優しいですね・・・」

とちよつと俺より身長が低かったらしく、潤んだ瞳と柔らかな微笑
みとしたから目線が・・・こう

「!・・・はは・・・」

グツと来たぞ!ものすごいグツとくる物が!すごい破壊力だ!

すつと身体を引いた・・・恥ずい、超絶に恥ずかしくなって来た
ぞ!

ちよつと離れると姫様が腕をつかんで来て

「あの・・・もうちよつとお願い出来ませんか?」

ドッキューン・・・なんかそんな効果音が頭に響いた・・・もう
やめてください!耐久力はもうゼロです!しかあし!男が廃るぞ!
ここで引くな!と何か頭の中で響いた・・・

ブルータス、お前もか。お前までそんなことをいうのか!?

と脳内コントしていても・・・やっぱり・・・断れないよね。

「わ、わかりました。」

と素早く移動してまた始める・・・

ポンポン・・・

少しの間だけこんな音が響いた。

「もう落ち着きましたか?」

「はい・・・すみませんでした」

よし終わったぞ!もうこれで満足だろう!・・・俺が恥ずかしくな
ってくる。

トコトコ・・・ストン

「ふう・・・」

姫様と反対側の場所に座る・・・

「本当に大丈夫ですか?姫様?」

とまたちよつと吹っ切れたので聞いてみる

「はい・・・それと名前で、その呼んでいただければ・・・」
と気恥ずかしそうに下を向いた・・・

本当にやばいぞ！破壊力が・・・

「わ、わかりました・・・どう呼びすればよろしいのでしょうか!？」

あ、裏返っちゃった声が・・・

「ふふ・・・私の名前はエリオーシュです・・・どうぞご自由に・・・」

「じゃあ・・・そうします。エリオーシュ様？」

なれないぞ・・・敬語は・・・まあ年上だからそうなんだが・・・
まあ少しは部活やっててよかったかもな？

「様は・・・要りませんよ？ヨシヤ？」

「・・・わかりました・・・ちよつと待ってください・・・」
少しは下を向いて目を閉じる・・・まあいいだろう。

「わかったぜ、エリオーシュ？」

ぱつと頭をあげてそう言ってみる

エリオーシュは一瞬びっくりしたようだったが・・・まあ・・・大丈夫だろう。

あれ？どうしてこうなった？あ、まだ聞いてなかったな

「なんで泣いて「伝令終わりました！」・・・」

すぐドアがあいて黒髪が入っていた・・・くそ・・・マジか

「どうかしたか？」

「いえ、なんでも・・・」

口調を戻す・・・元の口調でしゃべったら完璧にヤバそうだ
黒髪はドカッと隣に座って来た。

「で、だ・・・大会に出るんだな？」

とまだ心配のご様子。

「回りくどいです。人思いに言ってください。」

もういい、もう心配なんていいから話してくれ・・・回りくどい

のはあんまり・・・

「わかった・・・ルールを説明する」

「はい」

もうどんなでもいい。

「この大会は、五人の騎士隊長と罪人を戦わせるんだ。

取り敢えずお前はこの五人と戦ってもらうことになる・・・取り敢えず俺も入っているぞ。

この戦いは一人一人で戦う・・・っていうかお前は連続で戦うことになる。

次にこの戦いでは罪人は死ぬか騎士隊長達に罪人が勝つかで1試合が終わる・・・ここまではいいか？」

「・・・はい。」

マジか、死んだら負けってか・・・そうですか。

「続けるぞ？・・・この大会で・・・騎士隊長は完全防備だ。対する罪人側は防具、武器それらの物は一切使えない。服は・・・薄い物だ。」

「ほら、だから私は・・・」

とまた姫泣きそう・・・

「大丈夫ですから・・・続けてください」

遠くからなだめる・・・

「わかった。・・・この戦いはアリーナで行われる。国民、貴族、王族・・・いろいろな人がくるぞ・・・要するに見世物ってわけだ。・・・しかし・・・その5人に打ち勝てば・・・一つ王に願いを叶えてもらえる・・・そうだ。」

「え？何か最後に説得力にかけてませんでした？」
本当に気になったぞ・・・

「ああ・・・その、そんなルールを作ったがいいがまだ誰も勝った者はいない・・・らしいぞ」

「マジですか？」

「本当だ。」

マジかよ？What？

「まあ・・・勝てばいいのでしょうか？勝てば？」

「なっ！よく、そんな性懲りもなくそんなことが言えた物だな・・・」

「勝てばいいって・・・」

まあここまで来たらヤケである、このまま行ってしまう。うん。

「あ、でもそんな罪人を一国の姫様と一緒に馬車に乗っていていいんですか？」

ぱつと話題をかえてみた

「まあ・・・いいんじゃないか？街に入る時に縛っておけばいいし・・・」

いいのか、それで？

「取り敢えず街まではまだ掛かるぞ？・・・着くのは・・・夜だな・・・それまではのんびりしているといいぜ」

「じゃあお構いなく」

それを聞いたすぐ横になった

「なっ！・・・まあいいか」

許して貰ったみたいだ・・・取り敢えずもう寝るか・・・

ふふ・・・俺を甘くみて貰っては困るぞ、俺は一日の半分は寝て過ごせる男だぜ。

「お休みなさい！」

「ふふっ・・・」

目を閉じたすぐになにか小さい笑い声がきこえたな・・・あ、姫か。

・・・いろいろな騒ぎがあったから・・・もう昼ぐらいか？まあいい、容易いぜ、寝ることなんて・・・

いろいろな考えていたら急に眠くなって来た・・・馬車の揺れがなんか・・・心地よくなって来た・・・

その次の瞬間にはもう意識を手放してしまったようだ・・・

どうしてこうなった？

(後編)

(後書き)

ふう・・・あれ？どうしてこうなった？・・・まあいいや。

大会前夜、それと自分の寝起きの悪さ

ポコーン・・・ポコーン・・・

そんな音が響く部屋の中に俺は居た・・・

見渡す限りの白一色。何故だか体が軽い・・・

「見覚えあるぞ・・・」

本当にこの白一色のこの部屋は見覚えがある。

「おい・・・見えてるのでしょうか？」

立っていた姿勢のまま目の前の壁に声をかける

・・・壁といってもテレビに、だけどね。

「・・・・・・・・」

無言。ただ声を出さずに目の前の物を凝視する

「・・・・・・・・」

直立だった体制から腕を組み、休めの体制でまだ見続ける・・・・・・・・

フォン・・・

少しの間み続けるとテレビがついた・・・と思う、なんか音がしたし。

「どうしました？」

と何故だか少し気の抜けた声。

そんな声が聞こえてからパツと画面がついた。

「なんで僕を、此処に、呼んだんでしょうか？」

区切り区切り言葉を言った・・・ああ少しイラついてます。

神様は少し画面のよった俺の顔をジッと見た。少し・・・恥ずい。

「えーっと・・・なんで此処にいるのか、という質問でした」「はい、自分の睡眠の邪魔をして此処に呼んだ理由はなんだ、と聞いているんです」・・・うう」

神様が言いかけた言葉に、神様が言い切らない内にセリフを被せる。

「自分はね、睡眠を、邪魔されるのがね、とおうつてもいやなんで

すよ？」

と軽い口調プラスとてもいいと思う笑顔で画面の神様を見る。

「あの・・・目が笑ってません・・・よ？」

神様は自分の顔の表情を見て何かを察知したのか少したじろいでそんなことを言ってくる・・・

「目が笑ってない？だから言ったでしょう？自分は睡眠を邪魔されたのがね、相当ここに来ちゃってるんですよ？」

と笑顔を変えずに頭をコンコンと叩く。

「・・・すいませんでした・・・」

さっきの気の抜けた声から一転、急に謝罪の体制に変わった。

「すいませんでした？答えになってねーよ？」

「・・・口調変わってますよ？・・・」

と現在とても怒ってる俺に・・・チャレンジャーだね、よく俺にそんなことが聞けたな？

「口調変わってる？そりゃあそうだよ、・・・怒ってる時にわざわざ敬語なんて言わねーよ」

少し語尾に力を込めている。

「・・・ここで昔話をしようか・・・あ、これは自分が体験した話だ。異議は認めません。」

ある日の授業中に俺は・・・その、居眠りだね。それをしていたんですよ。その時に起こしてくれたらしい男子が・・・

「お前は悪魔か！？」

と少し声が震えた様子で授業の終わりに話しかけて来たんだ。

で、何が悪魔？って聞いたんですよ・・・するとね。

「お前が・・・いや、あなた様が悪魔になられたんです」

と変に俺に敬語なんて使って来たんだ・・・なんだったんだろうね？

自分は親からも寝起きが悪いとか言われていたが・・・今ここでわかった。自分は寝起きの時少し壊れるんだ。

「で、なんで自分をここに、呼んだか、と聞いているんだよ、なあ？」

この時の自分の顔がみてみたいぜ。

「え、それは、その、・・・・そうなるからです・・・・」
と少し言葉に詰まって言った。

「そうなるから？ふざけんじゃねーよ！」

少し思ってることをぶちまける

「俺は寝たいんだよ・・・・俺の睡眠を邪魔するな。はよう戻せ。」
さっきのでもういいや・・・・早くあっちの世界に戻って寝たい。

「・・・・すいませんすいませんすいませんすいませんすいません
ん・・・・」

「え・・・・ちよつと？」

何か画面の向こうで神様が顔を手で抑えて壊れた何かの如くすいませんを連呼してる・・・・

そのため怒ってたのが抜けて心配をし始める。

「え・・・・あの・・・・大丈夫ですか？」

「すいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいません
んすいません・・・・」

ダメだ。なんかずつとすいません言ってる。

「わかりましたから！もう言わないでいいですから！もう怒ってませんからあ！」

と自分から折れる戦法で言ってみる事にした。

「・・・・・・」

神様は手をゆっくりと退けて自分の方に目線を送ってくる・・・・
おおう涙目じゃん。あ、今気づいたけど神様目の色が緑なのね。

「・・・・すいませんでした」

ぼそりと謝罪の言葉が出て来た・・・

「大丈夫ですから」

と画面に寄せていた顔を離し姿勢を正した。

「すいませんでした」

さっきから少し間を開けてすいませんでしたを連呼してる

「だからもういいですって……もう一度聞きます、なんで自分はここに？」

とさつき心を落ち着かせ、冷静に聞いてみる。

「……それは異世界はどうでしたかって聞こうとしたんです……
・寝起きが悪いなんて知らないで……」

とまた顔を塞ぎそうになった。

「……異世界はどうですか、ね……多分自分は明日死ぬんじゃないですか？みてたなら知っているでしょう？」

と言ってから神様は自分の顔をみてる

「……その能力があれば死なないのでしょうか？」

「うん、確かに。でもね急に思いつかないんだよ、それが」

そうなのである。急には思いつかないのである。

「あ、それと大会の時には薄着なんだって」

「……そうなんですか」

と少し視線をずらした。神様が。

「うーん……半袖短パンでいっか」

と自分は着ている服装を見る。

今ここにいる自分はまず学生服。上着の下にワイシャツ、そのしたに半袖短パン。

「……え？おかしくないかって？部活してるし、朝練の時に面倒くさいしね。この方が楽なんだよ。冬あったかいし、夏暑いけど。
「そうですね……それでいいんじゃないですか？」

とすっかり通常運転の神様に戻った……

「じゃあ戻してくれます？もうあっち戻りたいんで」

もう服装の事はいいや。と踏ん切りつける。

「あ、はい……じゃあお詫びにレポートでお送りします。」
「お、ありがとうございます」

と安堵の表情を浮かべる俺は……実はジェットコースターが大嫌い……と言うか生理的に受け付けないのである。昔乗った時なんかリバース仕掛けた。最初に落ちた時は叫んだりして紛らわせた

りしたが無理なのである。だからその言葉はとてありがたいと感じる今この頃で有ります。

「じゃあ送りますからちよつと待ってください……」
と神様は画面から外れた

ガタン！ガガガガ・・・ガチャン！

・・・金属を倒したりするような音が聞こえる。幻聴だな、うん。
神様が機械なんか使うはず・・・

「おまたせ、しました・・・」

と画面に出てくる神様が神がボサボサになって手に何かの機械があった。

マジかよ！俺の神様象を壊さないでくれよ・・・

「えーと・・・ここをこうして・・・あれ？」

手に持ったシャーペンぐらいの長さの機械をいじり始めた神様。

「・・・・・・」

少し苦笑いで見える俺はどうしたらいいんだろうね。

「あっここだ。」

ポチッと側面についてるボタンのようなものを押した神様。
ガタアン！！

と聞いた事がある音。

「ええええええええ・・・・・・」

としたに落ちる俺・・・あ、気持ち悪くなって来た・・・

「うっわ！！」

ガタァン!!ゴッ!!

「うっ!」

そんな音をたて自分は起き上がった・・・あれ頭がとても痛い? そう思った自分はキョロキョロと馬車の中を見回す。

「うあああ・・・」

自分は少しフリーズ・・・え?なんで?なんでなの?

なんで姫様が頭を抑えて自分の隣の座るところに顔を押しさえつけてるの?

「大丈夫ですか!」

とすぐに立ち上がり姫のところに移る。

「う・・・はい、なんとか・・・」

とおでこをさすりながら自分の方を見てくる・・・おおう涙目になってる!?

「え、どうしたんですか? なにか自分もおでこ辺りが痛いんですが?」

と自分もおでこをさする

「え・・・つとその、寝顔を見ていたんです・・・」

視線をズラして言って来た・・・あ、姫は目が青い。今気づいた。

・・・え?寝顔を?見てた?

「寝顔ですか・・・そうですか?」

と自分は少し考えるようにしたを向く・・・寝顔ねえ・・・どんなだろうか?

「はい・・・そうですね・・・あ、もうちょっとでつきますよ?」

少し詰まるように話してから話題を振って来た。

「あ、そうですね・・・じゃもうちょっとで自分は死ぬかもなんですね」

「そんなこと・・・言わないでください・・・」

と姫は顔を下に向けて心配そうしてる・・・え?

なんでこんな姫様は・・・怪我とかさせるようなことをした自分を

ここまで気にかけてくれたのだろうか？さっきだって泣いてたし・・・
・と考え外を見る

「おおう！」

と声を出した。夜だった。なんでこんな声をだしたかはわからんが夜だった。

その暗さの中で自分は何かを見た・・・壁？

「ねえ・・・姫様？」

とすぐに疑問を解決すべく声をかける

「は、はい？」

と少し弱い声でそう答える姫様。・・・よし。

「あれはなんですか？」

と窓から体を引き外に見えている壁を指差す

「あれ・・・ああ王都ですよ？」

と姫は窓に近寄り目を細めそう答える・・・

「へー・・・」

ガチャ

「失礼します」

と疑問の声を上げた直後声がした・・・黒髪か。

「・・・・・・」

と黒髪がこっちを見て何かフリーズしてる・・・

あー・・・現在姫様と自分は窓の外と一緒に見ているので結構近いです・・・距離が。

「お前！なにしてる！姫から離れろ！」

と急に怒鳴り剣を抜いて自分の方に向けてくる

「おっと、これは違うんだよ？一緒に外を見てただけで「早く離れろ！」・・・」

言いかけたところを黒髪に遮られ体を引く。

何故最後の方言葉を出さなかったのは・・・あれだ剣を首に当てられたから。怖いべ？

「ゼル！剣を戻しなさい！」

と斜め後ろからの声。姫様だ。

「・・・・・・・・わかりました」

とスッと自分の首から剣を引き鞘にしまう。そして自分と反対の座るところに座った。

自分はそれを見て座った。姫も気まずそうにゼルとよんだ男の方に座った。

「あ、あのー質問があるんですが？」

黒髪の方になるたけ安全だとおもう言動で質問する

「・・・・・・・・何だ？」

黒髪完璧に戦闘モードで答えてくれた、しかし左手は剣に乘せられた。

多分自分に変な動きがあったら切るつもりだろう・・・・・・・・しかしと
りあえず了承は得られた。

「あの・・・大会はいつでございますか？」

とこれまた失礼の無きように聞いてみる。

自分の考えでは何日かあとだと思ふんだが・・・・・・・・

「明日だ」

と低い声でそういった黒髪。

「・・・・・・・・は？」

少し気の抜けた声が出た。

「急いで準備したと言っていたからな」

・・・・・・・・マジですか？そんなお祭り好きなんですか、その国の方達は？

「・・・・・・・・もうすぐ着くぞ・・・腕を出せ」

その言葉をいい、どっかから縄を取り出した黒髪。

「あ、はい」

スッと黒髪に両手を差し出す

「・・・・・・・・」

無言のまま黒髪は縄を腕に巻きつけていく・・・・・・・・

「できたぞ」

と手を離す黒髪。

おおこの巻き方すごいぞ。ものすごい動かしても取れない……ん？縄になんか模様が……

「この模様はなんですか？」

と模様が書いてある右手を近づけた。

「……………」

答えない黒髪。

自分が考えるに魔力封じとかそんなかな？ここファンタジーの世界だからその位のやつならあるだろう。

「もしかして……魔力封じかなんかで？」

と縄を見ているのをやめ黒髪の方を見る。

「!……そんなもんだ」

少し驚いた様子でサツと立ち上がった。

「降りろ」

自分の巻かれてる腕から出てる縄を引っ張る黒髪。

「うお……………」

引っ張られ扉の外に出る。

すると馬車は止まった。

「入れ」

そんな声が聞こえ辺りを見回す。

……どうやら何時の間にか壁の内側に入ったばい……しかし目の前には何か……こう闘技場のようなところの入り口にいた。

「はい……………」

と引っ張る黒髪のあとについて大きな入り口にはいった。

少しばかり歩き何かの広い場所に出た。

「闘技場だ」

と前を歩く黒髪から声が聞こえる……

ほう、ここで明日の大会が行われるのか？と考えながら歩く。

「……………」

黒髪は無言で壁に沿って歩いて立ち止まった。

ギィィ・・・

そんな音がして何かが開いた・・・扉かな？
と見ていると

「・・・・・・・・」

黒髪はこれまた無言で開いた扉の中を指差す
多分入ってことなのだろうか。

「・・・・・・・・」

自分も無言で扉の奥に入る。全部入り切ったところで扉が大きい音をたて閉まった。

「ちよつと！？おい？！」

と縛られてる両手で入って来たと思われる扉を叩く。

「明日を楽しみにしとくんだな」

外からそんな声が聞こえ、歩き去る音が聞こえた。

「・・・・はぁ」

自分はため息をついて周りを見回す

上のほうについている鉄格子っぽいところから月の光と思わしき光が見える・・・・

・・・・４メートルの正方形の形をしたところに入れられたらしい。

あ、申し訳程度の藁が部屋の隅に置かれている・・・・これで寝ろってか？これで？

と少しの間その藁をじーっと見続けて

「もういい・・・寝よう」

自分は折れた。もういい、自分は寝たいんだ。

藁のほうに近寄りドツと腰を降ろす。そのまま倒れ横になる。

「もう自分は寝たいんだと思えば・・・寝れるもんなんだよ。」

と誰も返答してくれないことを言い目を瞑った。

大会前夜、それと自分の寝起きの悪さ（後書き）

皆さんはiPadで文を書く時には気をつけましょう。運が悪ければ書いていた文がいきなり消えますww

大会・・・え・・・まだ？
(前書き)

わーい。誕生日だー。

大会・・・え・・・まだ？

「ん・・・」

そんな声で自分は起きた。

パツと見た感じ日の光が鉄格子っぽいものから漏れ出てる。

「痛っ！・・・はぁー身体中痛いぞ・・・」

自分は鉄格子っぽいものから漏れ出てくる光のほうに目をやり、首や背骨などのところをコキつと鳴らす。

「あ、外れた」

と自分の両腕に巻かれていた縄が外れちゃってる。

・・・まあいつか。

自分は部屋の隅に縄を投げた。

「あゝああ・・・よく寝たゝ」

立ち上がり周りをキョロキョロと見回す。

「おお・・・キツタネー・・・」

汚れを避けるようにして自分は部屋の真ん中に移動する。

なんで移動したのかって？それはね・・・

壁全部がなんか・・・こう、体に良くない色して見た感じぬめつとしてる。

綺麗好きの現代人がこんなの見て安心できないっしょ？

「・・・外見れるかな・・・っと」

唯一光が漏れてる鉄格子に近寄り、そしてよじ登る。

「ほおう・・・」

自分は外を見て少し感動した。

見える範囲は狭いが、俺が住んでいた場所には無い・・・なんといえばいいんだ？ヨーロッパ風？な建物が建ち並んでる・・・っぽいけど

「人いねーな」

そうなのである。何かこう、生活感溢れた感じに自分には見える景

色には一人も人がいないのである。

「・・・・もしかして朝方？・・・・ふっ・・・・と」

自分は太陽のほうをちらっと見て鉄格子に捕まっていた手をパツと離し着地する。

「たしかたしかーっと・・・・あ、あったな・・・・」

今着ている基準服の内側のポケットを漁りある物を発見する俺。

「今何時だ？」

見事に内ポケットにあった自分お気に入り時計を取り出し見る。
はい、ここで違和感。

取り出したはいいものの・・・・何ということでしょう。

「完っつ璧に壊れとる・・・・」

うな垂れる。

だって考えてみ？自分がお気に入り時計が・・・・何かは知らんが・・・・なんといえばいいんだ？・・・・あの見るところがぼつきばきに壊れとるんだぜ？

「お気に入り・・・・せっかく買ったお気に入り・・・・」

自分は完璧にぶっ壊れてる時計を目の前に置いて膝を着き、頭を抱える。

「高かったのに・・・・」

と壊れた時計を眺め少し涙目になる。

これは・・・・その自分が死ぬ何日か前に買った10000円の腕時計である。

10000円が高いって？・・・・自分の懐事情を舐めてはいけないよ？

中学生の財布事情はとて大変、火の車。・・・・まあ沢山のものを買った自分が悪いのは重々理解してる。

だから10000円はとも俺にはでっかい出費なのだ。

プラス自分の自分の家はお小遣い制ではないとここに記しておく。

うちでお小遣いが入るのって言ったらクリスマスかお正月か、親父の誕生日だけだよ・・・・

「・・・・・・・・・・はあ」

ため息を着き、壊れた腕時計を基準服の内ポケットにしまう。
壊れたらもうなにもできやしない・・・・あ、直せるかも。

「おお・・・・・・・・・・自分には力があるしね・・・・」

と自分は内ポケットにいれた時計をすぐに取り出し目の前に置いた。

「タイム風呂敷ー」

シュン

「おお出てきた・・・・」

出現させた物を見る。・・・・あんまり変わらん。普通のと。

「・・・・・・・・・・」

自分は少しの間それを眺め無言で時計に被せた。

「もういいかな？」

と被せてあった風呂敷をバサッと取る。

「直った・・・・」

そこには完璧に直った腕時計があった。

「・・・・・・・・青いなんとかロボット・・・・やめておこう」

自分は言いそうになった言葉を引っ込める。・・・・何かヤバそう
だったからね。

「戻れ」

シュン

と手に持っていた風呂敷が一瞬で消え、キラキラとした光が・・・・
見えたような気がした。

「・・・・・・・・・・よし、出来た」

腕時計を早速自分の右手に巻く・・・・いい感じだ。

と考え、立ち上がった。

バタンツ！

「来い。」

となにかすごい重装備の兵隊さんが入ってきた。朝日でなんかぴか
ーっと光ってる。

・・・じゃなくて！

「はい」

自分は短い返答をし、扉の向こうに出る。

・・・なんということでしょう。

「すつげえ広い場所だ・・・」

自分は360度ぐるっと見回し驚きの声。

・・・広い。その一言。

なにか戦うところっぽい場所が・・・円状にあって広さが・・・
簡単にいうと50メートル走ぐらいよりもっと大きい感じ？

そして上の観客席っぽいところは・・・階段状になっていてそれが360度分だから・・・千人はいれっかな？

「なにしてる、速くしろ！」

ゴッ！

「痛っ！・・・わかりました」

自分が360度見てると後頭部に剣の平べったいところで叩かれた。
めっちゃ痛い。シャレにならん。

少し不満の声を漏らしながら鎧兵士さんのあとをついていく。

・・・手に剣持ったまんまだし・・・逆らったら切られそうだ・・・

・

「ここで待ってろ。」

と鎧の兵士さんにここで待ってるように言われた。

あ、兵士さんどっか行った・・・

・・・まあ安心だな。だって

両手を後ろ手にされて縄をぐるぐる巻きにされたりした。

・・・力を使えば外せそうだが・・・やめよう。まだ死にたく無い。

「・・・はあ」

自分はため息を着き状況を把握するためキョロキョロと辺りを見回す。

現在、なにか大きな木の温かみが有りそうな扉の前に立たされてる。以上。

なんでこれだけだって？それはね・・・なにかの魔法見たい。

いつからかけられたかは知らんが歩いてる時にずっと自分の足元しか見えなかった。

・・・足元みえんのに周り一切見えなかったんだぜ？これで勘弁願いやす。

「・・・・・・・・・・はあ」

また大きなため息を着く。

すると、ギギギ・・・と重い物を引きずったような音がして扉が開いた。

「おお・・・え？」

と驚きの声を上げたと同時に何時の間にか現れたこれまた重装備の兵士さんたちに四方を固められた。

結構早い速度で歩き玉座の・・・前まで来た。

「（まだいないのか・・・）」

と心の中で言う。

目の前には大きい玉座。高い天井。しかも結構金を使ってる・・・いていても所々だけか。

「（結構質素？そんなことはないか・・・）」

とキョロキョロと上やら下やら右左を見ている俺。

・・・ん？なにか玉座の後ろから赤いマントを着たおっさんが出て来た。

おっさんは玉座にゆっくりと座りこちらを見た。

「お前が・・・今日の祭りの主役か？」

と低い声。顔は結構若いな・・・40位か？

・・・返答に困る。こういうのは始めてでしかも・・・死刑囚？がしゃべってもいいものか？

と考えて王様らしき人に目をむけた

「……精々生き残りをかけ頑張るように」

と言い切って赤いマントをたなびかせ玉座の後ろに引っ込んでしまった。

するとサッと四方を囲んでいた人たちがクルッと後ろを向いて歩き出す。自分も釣られ歩き出す。

「（これだけ?）」

この一言が頭の中をぐるぐる回った。

ほどなくして玉座の間の扉が閉まり、歩き出した。

……さっきみたいに足元までしか見えないなんらかの魔法が働いたらしく、急に視界が狭くなった。

大会・・・え・・・まだ？（後書き）

今回は少し・・・っていうか短く少し表現を変えてみました・・・
・いかかでしょうか？

感想等々いただければ幸いです。

大会、一人目

「・・・・・・・・むう」

自分は座りながら腕を組み唸る。

今いる場所はさつきと同じ・・・牢屋でございます。
連れていかれたと思ったらまた牢屋のなかでござい。

「・・・・・・・・よし」

立ち上がって腕を組んだまま光が入ってきている鉄格子を目指す

「ほっ・・・・・・・・とお」

鉄格子の前にきた自分はそんな声を出しジャンプして鉄格子に捕まる。

自分が壁を使って登れるから・・・だいたい3メートルぐらいかな。
自分はそのまま鉄格子に掴まったまま外の景色を見る・・・

「おお・・・・・・・・なにか人がいっぱいおるぞ？」

外をみてそんな声を上げる。

だって・・・超沢山の人で足のところしか見えないんだもん。

・・・ってことはこの牢屋は外と高さが違うんだなと思いました、
丸。あれ？作文？

などと人路で脳内コントをしていながらまだ外を見続ける。

・・・半ば公開処刑のようなことが起こるとゆうのに、なんで人はこんなにこれるんだろう？

男女問わず年関係なくいろいろな人が鉄格子の外を歩いて行く。

・・・まあ俺もこの街の人だったら見にくるんだろうな・・・・・・・・

「はぁ・・・・・・・・よっと」

そんな考えを振り払うようにため息を着き、トンつと下に降りる。
そして自分は部屋の真ん中にドカツと座る。

「暇だ・・・・・・・・」

と下に首を垂れながらつぶやく。

・・・まあもしかしたら自分はしんでしまうかもしれないんですが

ね？暇なんですよ。

朝方位しかこの部屋の外に出てない。

自分は何回のそんなことをしつつ、外を歩いてるだろう人々の声を聞きながら目を瞑った。

「ん？・・・あゝああ・・・」

と少し意識がとんでいた体を起こす。

「よいしょっと」

自分はすっと立ち上がった。

・・・あ、自分が寝ていた体勢？胡座だよ？自分は座ったままで寝れるのさ。

授業中寝ていた間に身につけた技さ。あ、聞いてないって？そんなものは認めない。

「ほっ・・・っせ・・・」

等の声を上げ、スクワット。自分の場合なぜかスクワットすると眠気がなくなるさ。

朝やってたら親に変な目で見られたのはご愛嬌。

「ふう・・・」

20回位スクワットをして、動きを止める。動かせる時に動かしとかなきゃね。

自分はそのまま立った状態で扉を見る。

ガタン！

「時間だ」

大当たりだ。ほら来た。全身鎧で包んだ兵士さん。

そのまま兵士さんはなかに入って来て俺の腕を掴み外に引っ張って行った。

「おわわわ・・・っと」

腕を掴まれたままで闘技場らしき場所の真ん中までいって腕を離された。

とても太陽の光が闘技場全体に当たる……夏かな？今？
などと考えてさっきの兵士さんの方を見る。

兵士さんは俺をおいてサツとどっかに消えていった。

……比喻じゃなくてさ？本当に消えた。びっくりだぜ。

と今起こった事に困惑気味にキョロキョロと辺りを見回す俺。

「すごい数の人……」

とこれまたびっくりである。

360度いろんな格好をしてるっぽい人たちで覆い尽くされている。
時々なんか叫び声が聞こえてくるし。

「ああ……そういう事」

と右手を手のひらを上に向かせた左手にポンッと叩く。

多分、結構長い時間牢屋にいたのは人を入れるためか。

自分は考えるためにしたを見ていた目を上にむけある一点に止まる。
自分が見た場所……それはあれだ。

多分、王様がいるところだろうな……

そこだけばかりと人がいなくて……壁で左右が閉じられて横
からははいれないようになってる。

そこに……なにか大きい椅子とんかがいる、そしてその横にな
んかがいる。

「んー……」

とよく見る為に目を細めたりしたがあんまり見えなかった。

なんだか知らんが……誰がいる……ぐらいにしか自分は見え
ない。

自分はそこまで目あまりよろしくないんでね……

0、8ぐらい……て生前言われていたような気がする。……生
前であつてと思う。

「へえー……」

と目を斜めにむけていたのを自分の目の高さぐらいの場所を見る。

……見た感じ自分が出てきた牢屋と思わしき場所とここにはいつ
てきたと思われる扉があったが閉ざされていた。……どうやって

客は入ってきたんだ？・・・まあいいや。

『はい！準備が整いましたので始めたいと思います！！！』

という甲高い・・・女の声？らしき音が響いてきた。それと同時に観客の人たちが歓声をあげる。

どんなものを使ってるんだ？・・・現代のマイクみてエなもんはねえしな・・・魔法かなんかか？

など考えて声が聞こえてくる方を見る・・・

『まずは一回戦！我らが炎騎士隊のリーダーです！！！！』

と何やら熱のこもった声で紹介する・・・？

えんきしたい？中二病くっさ！！

と聞こえてくる紹介に笑う。

シュン

「お？」

と後ろからそんな音がしたので振り返る。

振り返ってみるとそこには驚きがあった。

なんとそこには何か・・・こう赤を主体にした鎧で身を包んだかっこいい人がいた。

髪は燃えるような赤。それが短く切りそろえられている。目も赤だった。

・・・ってことは兜はしていないからみえるんだね。

まあ・・・相手が武器を持っていないからか？

と観察しているとそいつはキッとこっちを睨んできた

「お前を粛清する！！」

と剣を引き抜きこっちに向けてくる低いけど大人になってなさそうな若い声。

あ、なんかがいるテンション上がってきた。

「はっ！さっさとやれば？」

と自分は・・・赤髪でいいか・・・赤髪に向かって人差し指をクイクイっとして挑発する。

あれ？どうしたんだらうか？自分は？

「……………すぐに消してやる!!」

と安い挑発に乗ったと思われる赤髪が走ってきた。

距離にして……７メートルほど……さっきから抜いでいた学生服をポイッと遠くに投げる。

「はっ!!」

ブンっ!

「おわっと!」

突っ込んできた赤髪は頭に向けて剣を横薙ぎしてくる……それを後ろに下がって避ける。

……なぜよれたかって? 人間しにそうになった時、すごいんだぜ?

「ほっ!!」

ブンっ!

「うわっ!」

左から右に横薙ぎした剣を振り下ろしてきた。それをこんども避ける。

自分はそのまま後ろに後ずさって距離を保つ。

「くははは!! 避けてばかりでは死を先延ばしにするだけだぞ!」
と距離を保ったままの自分にそんな事を言ってくる赤髪。

「……………いいんだな? やっても?」

何か自分のなかで理性が弾けた。

「はぁ? やるなら早く来いよ!」

と了承は得られた。

「……………」

自分は顔をしたに向けてブツブツと呟く。
シュン

「…………『スナッチ』!」

と変異した右腕を赤髪に向かってブンッと突き出す。

「クッ!」

と赤髪は変な声で出した。

そりゃあそんな声が出ちゃうわな。

だって届いてない右腕の代わりにもう一つの手が自分を掴んでるんだからね。

「ほっ!!」

ともう一つの右腕で掴んだ赤髪を高く持ち上げる。

「離せ!!このっ!!」

とかいいながら自分を掴んでいる大きな右腕に向かって剣をブンブンと振ってる。

「くらえ!『バスター』!」

ドゴォ!!

とそんな音を出し、赤髪を地面に叩きつける。

あ、自分がした事?それはね、赤髪を掴んで叩きつけただけだよ?

・・・あー・・・悪魔の右腕強っ!中二病万歳。本当に出来た。

「くっは・・・」

と痛みを耐えているような声が聞こえてくる。

・・・まあ地面が凹むぐらい叩きつけられたら痛いじゃ済まないよね。

俺は凹んだ地面に叩きつける赤髪に顔を近づけた

「くっ!・・・」

近づいてきた俺の顔をみて睨んできた。

「悪いな、正当防衛だ・・・許せ」

・・・過剰防衛っぽいけどね。

「・・・」

何か自分を睨んできていた赤髪が力尽きたっぽい。

シュン

「お?」

目の前にいるはずの赤髪が消えた

『炎騎士隊隊長魔法も使えずすぐにダウンだっ!!!!』

とまた声が響いてくる。

自分はさっきの攻撃で凹んだ地面の方を見る。

「ほう・・・」

本当に凹んどる・・・何十センチか地盤が沈んでるぜ？

『はい！！それでは次の隊長さんをお呼びしましょう！！』

と響いてくる声を聞きながら自分はしたを見ていた目を、次の相手がくるであろう方向に目を向けた。

大会、一人目（後書き）

・・・戦闘が書きづらい・・・！・・・

大会続き!!! あれ? 早くね?

『はい!! 次の隊長さんをお呼びしましょう!!』

観客の心を掴むような何か熱い声が響いてきた。

観客も何かテンション上がってきたっぽいね。

「さて・・・っと」

自分は次の相手がくるであろう方向を向く。

シュン

「おっ・・・来ましたか」

と自分は出て来た人を見る

「・・・次は俺だ」

とても低くしかし何か響くような声をあげながら男は立ち上がった
今度は茶色を主体として用いてある鎧だ。それを上半身下半身に纏
っている・・・軽装っぽいけどしっかりと守られてるっぽい。

この人も顔は出しており、茶色の短く切りそろえた髪の毛に、整った顔してる、いわゆるイケメンである。

以上自分リポートでした。

「さてと・・・」

自分は軽く余裕そうに振る舞うべく屈伸運動をする。

・・・内心超焦っております。

「余裕そうだな・・・」

と少し呆れた感じにいつてきた。

・・・全然余裕じゃないけど・・・むしろ軽く逃げたい気がする。

「・・・そう見えますか?」

と茶髪の人に尋ねる。

「・・・」

しかし男は無言で剣を引き始めてこっちに向けてくる
ザッ・・・

後ろに数歩後ずさる・・・

「（どうする！？仕掛けるか？）」

と自分のなかで考える。

あ、考えられる。・・・さっきのから落ち着いたっぽいね俺。

どうしようか・・・

「フン！」

ヒュン！

「あわぁ！！！！」

自分は飛んできた何かを左に跳んで避ける。

・・・なに飛ばした？

と考え飛んで来た何かの方を見る。

「・・・？」

しかし何もない。

「はっ！」

あいつは剣を振った。

ヒュン！

「おわっ！！！」

これまた飛んで来た何かを避ける。・・・しゃがんで。

・・・避けた自分がそんなに驚きなのか茶髪は顔を少しゆがませながらこっちを見てくる。

「・・・お前・・・何者だ？」

と聞かれ答えに詰まる。・・・どうしよう？

「・・・ただの十三歳ですけど何か？」

としゃがんでいた状態から立って答える。

「・・・フン・・・」

と軽くあいつは受け流した。

あ、あいつから聞いて来たから答えてあげたのに・・・

もう勘弁ならんぜ。

「フライング・・・」

と自分は姿勢を少し低くし右手を体より少し後ろにやる。

茶髪はそれを見て何を思ったか後ろに下がった。

「フオーク!!」

引いていた右手を力強く相手に向ける

「!？」

茶髪は急に剣を前に構えた。

ギィン!!

「うお!!」

と何かに弾かれた剣を落とす男。

「よく見破ったもんだね……」

と挑発気味に聞いてみる……

「くっ……何なんだお前は!？」

と素早く剣を拾って自分に向け、混乱した様子で聞いてくる。

……さあどう答えようか？

自分はゆっくり茶髪に近づきながら考える。……あっ! いい
考え思いついた!

「自分?……化け物かな？」

軽く不安感を与える為にそんな事を言って見た。

「しょ、障壁よ!!」

と慌てたように剣を自分に向けて来た。

「おおう？」

ズズズズズズ……

こりゃ驚きだ。360度土が囲い始めた……便利だな……

「は、ははは!!!!これでは出られまい!!」

高さ4メートルほどの土壁に4方を囲まれた。あ、上は閉じられて
はいないっぽいね……

茶髪は安心したかのように笑い声を壁の外から響かせてくる。

さあどうするか?……あ、腕は動かせるぐらいの広さはある。

「ど、どうだ!!出られないだろう!？」

とさっきのカッコいいのはどこに行ったかヒステリックに声を荒ら
げてる……

「さっさと降参したら・・・殺さないで置いてあげるよ」

・・・以外とよくしゃべるのね。

・・・あ、またテンション上がって来た。

「降参?・・・消すぞ」

と自分はこれまた右腕を後ろに下げた。・・・まあ壁に挟まれてるからあいつには見えないとは思うが。

「ははは・・・そんな強がりと言える立場か!？」

とバカにするように壁をコンコンつと叩く音がする。

「あ・・・もう知りませんよ」

さらに右腕を後ろに下げ、左手を狙う位置を定める。

「なにが出来るって!?!なにが!?!」

これまたコンコンしてる。

自分はそれに答えず、右腕に力を込める。

「二連!!!」

振りかぶる体制にはいる。

「釘パンチ!!!」

ズドド!!!!

ガオコン!!

「な!?!・・・」

と目の前に見えるは完璧に驚きの顔をした茶髪。

そりゃあそうか・・・だって目の前の壁が、安全だと思われた壁が、ぶっ壊れたんだからな。

「ふう・・・」

自分は清々しい顔をしながら壁の破片を乗り越え、茶髪の前に行く。

・・・あー痛かった・・・右手。

「あ・・・あ・・・あああ」

茶髪は完璧に腰を抜かしたのか地面に腰を着き後ろにズリズリつと下がって行く。

「ははは・・・さっきまでの威勢はどこにきえたんでしょう?」

と下がって行く茶髪に左手で右手を摩りながらゆっくりとその間合

いを詰めて行く。

「ば．．．ば．．．」

．．．なにか壊れたみたい？

「ば？聞こえないな？何だって？」

さらに間合いを詰めてついには足元につくぐらいの距離に行けた。

「化け物．．．化け物だあ！！！！」

そんな叫びが闘技場に木霊する。

「ふはははは．．．．．止めを刺すぞ？」

最初は軽い口調で笑い、後半はドス低い声で。これは自分流脅しの基本。多分トドメに使うと効果的。

「．．．．．」

バタツとついていた腕を地面に落とした．．．あれ？何か目が白目剥いてる。

「あれ？あれ??」

つついたりして確かめる。

あ、完璧に気絶か？白目剥かれたの始めてだから完璧に驚いた。

『はい！！土堅隊隊長さん気絶です！！！！』

と甲高い女の声がして目の前の茶髪が消えた。

周りからは大歓声．．．しかし結構罵倒の声が多いような多くないような．．．感じである。

『はい！！これからしばしの休憩が入ります！！！！』

何故だかまた熱く言ってるね．．．

ん？休憩？何の為だ？自分の休憩か？んなわけねえか．．．
と考え視線を上にあげ客席を見回した。

『えゝここで残念なお知らせです．．．』

突然聞こえた放送に耳を傾ける。

かれこれ10分はなにも言わなかったな．．．

．．．残念なお知らせ？何だろう？

とキョロキョロと声が聞こえる方を探す。

『えー・・・審議の結果・・・残り三人の騎士隊長さんの内二名が棄権だということです』

・・・え？棄権？なんで？

『しかしまだ一人が残っております！！！召喚しましょう・・・この方です！！！』

・・・この人、民衆を心を掴んでいる・・・だと！？

民衆はそれに答え歓喜？の声を上げる。

ここで疑問発生。残りの一人はだれだ？

バシュウ・・・

「お？」

とさっきみたいに関ろから聞こえたさっきより少し強い風の音が聞こえ、振り返る。

「・・・・・・」

発生時にでた煙を体に纏ってるみたいに見えた。

「お！あんただったか」

自分はそんな声をあげ現れた人物・・・黒髪に声をかける。

「ああそうだ・・・俺が相手だ」

何日か前に聞いた声よりも低く、黒髪はそう答えた。

「あんたは棄権しなかったのかい？」

屈伸運動しながら問う。

「棄権？・・・はっ！おあいにくさま。自分はいくらみたく弱虫ではないんでね」

・・・このひと自分の仲間をけなしているが大丈夫か？

「ははっ！それは結構ナコッタネ」

・・・何だか屈伸運動しながらあいつとの距離を目測で測っていたんだが自分は壊れたっぽい。

・・・距離にして・・・6メートル？どうだろう？

「・・・ずいぶん楽しそうだな」

と口角をクイツと吊り上げながら聞いてくる黒髪。

「あんたも楽しそうな顔してんじゃないのか？」

と屈伸をやめあいつの方をみる。

「……自分はこんな風に喋ったっけ？」

「……ははははは……確かに。」

「……完璧に笑ってやがるぜ。」

「命の取り合いは楽しいからな？お前もなんだろう？」

と口角を吊り上げたまま聞いてくる。

「どうなんだろうねえ？」

と今度は手首をストレッチしながら言う。

本心を言うとな命の取り合いなんか始めての自分が居る。

戦争なんて知らない自分が居る。これは確かだ。

でもなにか……こみあがってくるもんがある。

「さあパッパと終わらせましょうか？」

あ、口調まで壊れて来た。

「ああ……始めるとしうか」

シャキーン……

そんなカッコいい音を上げ剣を引き抜く。

あ、剣が光ってるみたいに太陽の光を反射させる剣……

それを自分の方に静かに向けて、構える黒髪。

「……」

「……」

無言でお互いを睨む。

その中を風が静かに吹いた。

「……西部劇か何かか？」

「はああああああ……」

と黒髪がなにやら気合をいれて居る様子。

「ん？」

後ろを振り向く俺。

・・・風？

とさっと流れて行く風がいった方向に振り向く。

「おお・・・」

おもわずそんな声をあげてしまう。

・・・風を纏ってる？嘘ヤーン。

「さあいこうか？少年？」

黒髪は笑ったままこっちを見てくる。

簡単に言おうか・・・風を纏ってる。

目に見えないけど黒髪の足元の土が砂煙になってる。

「我が名はゼル！『激風』のゼルだ！」

剣をこっちに向けてそう名乗った。

「俺の名は義也！普通の義也だ！」

とビシィっと右人差し指をゼルに向ける。

・・・恥ずかしくなんてないもん！！このノリなら大丈夫だ

もん！！

軽く恥ずかしくなったので手を下ろす。

「さあ・・・こっちからいくぜ！！」

構えて来た為こっちも構える。素手だけど。

「ハッ！！」

ズダン！

「うお！？」

ブンッ！

驚いた。一瞬で5メートル以上の間を詰めて来た。

そして的確に頭という急所を狙った一撃。

それを髪の毛何本か切られながらもギリギリで姿勢を下げて避けた俺。

シュン

「やるじゃあないか」

と一瞬で距離を開ける黒髪。

「まあな・・・っと」

少し崩れていた体制を立て直しながら言う。

「・・・バーン・ストーム!!」

「おっと」

ズドン!

隙をついてみたけどダメでした。なんちゃらプロファイルのなかで結構好きだったんだがな・・・

・・・黒髪は歩かずにそれを避けた。チートかあんたは?

「シャドウ・サーバント!!」

間をいれずに次の魔法。

「よ・・・っと」

ズダンズダンズダン!!

これまた避けやがった。なんだってんだ。

「お前、魔法使いか?」

と軽く驚いた感じに聞いてくる。

「さあね・・・」

軽く受け流し、次の工程へ。

「ボイド・エクストリーム!!」

そう自分は言うのと黒髪の周り、2メートルのところに緑の輪っかが回る。

「くっ!!」

何か危ないと思ったのか瞬間移動みたいに行行った。

ズン!!!

「あ、外した」

高さ10メートルはありそうな剣みたいなものが足元から伸びて居る光景。

人曰く『お江戸・エクストリーム』をやってみました。

そしてすぐにそれは消えた。

「お前・・・なんつーあぶねえもん使えるんだ？」

ひたいを拭いながら聞いてくる。冷や汗でもでたのかな？

「どうなんでしょうね？」

といいながらトンつと後ろにジャンプする。

フッ

「な!？」

驚いてる黒髪。さあどうするか。

「後ろだぜエ!!」

とわざわざバラすように真後ろから大声を出す。

「くっ!!」

パツと後ろを振り返る黒髪。

だがもう遅いぜ。

ガッ!

そんな音がでそうなくらい激しく肩を掴む。この際鎧なんて気にせん。

「気絶!! プリイイイイズ!!!」

バチバチバチイ!!

「ぐあああああ!!?!?!」

ガタン・・・

そんな音をだして崩れ落ちる黒髪。

あ、何をしたって? 瞬間移動の際に電気能力をお借りして、黒髪の肩を掴んで電気を流し込んだまでさ。

あ、卑怯っていう声は認めんぞ? これが俺の戦い方だ。

「ふう・・・」

倒れた黒髪から手を離し2、3歩黒髪から離れた。

まあ・・・大丈夫じゃね? 多分。

などと考えキョロキョロとあたりを見回す。

『あ・・・なんと!! 最後のトリデが崩されました!! なんと!!
! この大会!!! 初の!!! 勝利者です!!!』

と高らかに言ってくれた女の人。

なんと二回言ったぞ。

この一言からの簡単に言うത്ワァーって声が闘技場に響いた。

『あ、ちよっと？勝利者の方？』

と放送のひとつからお声がかかった。

「はーい！ー！なんですか？」

ブンブンと両手をふってその人がいるであろう方向にする。

『お！ー！いい反応頂きました！ー！あ、また牢屋で悪いんだけど少しの間だけ入ってくれるかなー？』

との事。

これには刃向かってても意味ないので聞いておこう。

「はーい！ー！」

と大声で手をふり、牢屋を目指すのであった。

俺でいいんで？

ちよっと。

自分がこの言葉を連想する際、あくまで自分の考えだが自分のなかの『ちよっと』は長くて10分くらいかなと思う。皆様はどうかい？皆様の『ちよっと』の感覚はどのくらいかな？

自分は何が言いたいかと言うとさっき実況のおねえさんには『ちよっと待っててね』と言われたわけだ。

ちよっと？マジ？おかしくない？小一時間待たせるちよっとってなにさ？責任者？責任者はどこぞ？！

と考える今この頃である。

「おい・・・ちよっと待てや」

誰にいうわけでもなく、誰かが返事してくれるわけでもなく自分は壁に向かって話す。

ようするに独り言。悲しい事この上ない。

「ちよっとって何ぞや？この場合はしばらくだと思う」

自分は座っている状況で右腕に巻いてあった腕時計をチラッと見る。

11時位だった。

・・・あれ？さっきは10時位だったと思う。ちよっとの感覚はズレてるんとちゃいますのん？

「ヒマーマダー？」

時間がなんとなく余ってるのでこれまた壁に向かって軽く片言でヒマを訴える。

死の危険からは回避できたがなんだこのあまりの時間は？あ、あれですか？俺の精神安定ですか？精神安定を図っているのですか？コノヤロー。

「ふおうっと」

暇を解消する為に鉄格子に飛び付く。あ、外の景色を見る為なんて悪しからず。

「んゝゝゝほへー」

と素っ気ない声を上げる。

多分理由がわかった。そういう事か。そういうことだったのか。

「客出しゝゝか」

その理由は自分が考えるに、客だしだと思う。だって1時間前ぐらいには自分の左側にたくさんの人が入って行ってるけど、今度は左から右に人が流れて行く。

何か流れて行く人たちが言ってたがこんな早く終わると思ってなかったらしい。ザマァ！！

ゝゝゝすいませんでした。軽く錯乱しました。

「よいっしょ！」

朝みたくスタンと着地、ほにやららら。決まった？決まった。

何か虚しくなった為、あげていた手を下げて、部屋の真ん中に座る。

「ゝゝゝゝゝ」

テンションが下がった為、周りを見回す。

「お？」

と何かを発見。この黒いものはゝゝ？

気になったので部屋の隅に落ちている黒いものを取った。

「ゝゝゝゝゝ」

無言のまま黒いものの埃を落とす為にバサバサと上下に振る。

基準服でした。砂まみれだよ。

投げた自分が悪いんだけどさ？こう、あそこまでテンションが上がってしまおうと投げたくなりませんか？

投げませんか。そうですか。

「よっと・・・」

いい感じに砂が落ちたので基準服のズボンを履く。軽くよろけたのはご愛嬌。

そのまま上の基準服を着る。まあワイシャツが無いから着心地に違和感があるが。

「・・・」

基準服を着てこれまた牢屋の真ん中に座る。

「暇だ」

さっきから自分はこれしか言っていないと思う。何か心に新鮮な物が欲しい。それか癒しが欲しい。

何でもいい、もふもふな生き物でいいからっ！

「暇だ」

もふもふな生き物を連想しながらつぶやく。早く出れねエかな？

そう思った俺は扉の前に行って扉をあけてみた。

ギギギイ・・・ボタン！

「おおっと！」

開いちゃったので素早く閉める。

管理どうなってるんだ？頑張ればこんなところ破壊するぞ。有無を言わず破壊するぞ。

これも面倒臭かったのでまた部屋の真ん中に戻った。

はい、ここで違和感。

問題です。自分はいつご飯を食べたでしょう。

・・・

今日食べてないでした。

はい、もうわかりましたね。

ギュルルル・・・

「腹がっ！」

という音がした瞬間自分は腹を抑え一気に体を前かがみに。

自分とした事がっ！飯を食うのを忘れていた！あ、飯自体なかったね！あははは。

「ぬぐう・・・」

止まるのを待つ。なってる状態で動くと死ぬ。なんとなく。

「ふう・・・」

止まった為、上体を起こす。

しかしどうするか？お腹が空いたよママン。どうしよう？僕悪いことして・・・しましたね。忘れてました。

と地面を見ていろいろと考え事。

ギィ・・・

「立て。」

そんな音と声がした方向を瞬時に向く。

ああ・・・救いの神が・・・来たわけじゃ無いけどやっと出られる。

「はい」

すくっと立ち上がり外に出ると言われたので出る。

眩しい太陽の光がさんさんと降り注ぐ闘技場。凹んだ大地。

シュールだった。

その目の前には何やら魔方陣。

「乗れ」

短い言葉で魔方陣に乗れとのこと。

「・・・」

キョロキョロをやめそそくさと魔方陣にはいる。

シュン

「お？」

一瞬で目の前の景色が変わった。

状況把握の為、あたりを見回す。

ああ見たことあるぞ。何かおっさんがいた部屋だ。

「入ります。」

後ろから声が聞こえ、自分の前に姿を現した兵士さんが扉に向かっ

て声をかける。

ギギギギ……

そんな重たい音がして扉が開いた。

こっからでも見てわかる。玉座に座っている、おっさん。その横に立っているのが姫だ。

「……………」

兵士は無言のまま俺の前を歩いて行った。それについて行く。

ある程度行ってから兵士さんは横にズレて後ろに下がっていった。

目の前には玉座におっさん。姫がいる。何かとても安心して顔だったがスルーするのでしょうか。

「……………」

立っていると何か変なので片膝を着いて顔を前に向ける。

……………なにかおっさんが驚いた顔をしてる。なんだろうか？とりあえず無視の方向で。

「……………初の勝利者おめでとう」

低いけどなんか声がかっこいいと思った。

「はい」

勝利って言っても不戦勝があっただけだね。

「お前の願いを聞こうか……」

単刀直入だな。まあいいだろう。

あ、考えてなかった。あー姫に任せちゃうか。

「それでは自分の処分は姫に任せたいと思います」

とゆっくりと姫の方を見て言う。完璧に面食らった顔してた。

視線を前に戻すとおっさんがこれまた驚いた表情。

「それはいけません！陛下！こんな得体のしれない男を姫様に処分を任すなど！」

左から目の前にいるおっさんとはまた違った感じのおっさんが口を挟んで来た。

……………なんだと？大会で勝ちましたよ？自分は？

少し視線を口を挟んで来たおっさんに向ける。

全身青い。口髭と髪が白髪が少しある。太ったおっさんだった。とりあえず視線を前に戻し、玉座に座っているおっさんをみる。カッコよかった。王冠とかしてないけど。髪は白かったがまだまだ威厳たつぷりといった感じ。

「・・・うるさいぞ」

と視線を俺から動かさず、言った。

「・・・エリオーシュよ、お前はそれでいいか？」

視線を俺から外し、姫の方をみるおっさん。

「はい。」

凜としたしっかりした声で同意の声を上げた姫。

「そういう事だ。諦めろ」

と太ったおっさんに声を飛ばす。

視線は向けていないが大層変な顔をしているのだろう。

「それで。エリオーシュよ。お前はこいつをどうしたい？」

ああこれで運命が決まるね！

となんとなく諦めながら視線を姫に向ける。

「・・・私はこの者を私の近衛隊に入れる事を望みます。」

しっかりと自分を見据え、一字一句しっかりと聞こえるように言っ
たばい。

「なっ！それはいけませんぞ！こんなガキを姫の近衛隊に入れるな
ど！！」

あ、本音が出たね。

「今なん「この者を馬鹿にするのは私が許しません！」・・・」

軽くプツンしかけた為に立ち上がろうとしたところを姫が声を荒
らげた為、その行動をやめと来ました。

「しかしそうでしょう！！こんなガキを近衛隊に置いたってなんの
価値もありませんぞ！！」

おっさんも声をあげ反論。自分完璧にプツンするまであと少し。
さっきの行動を中止したものの、視線だけはおっさんに向ける。

「貴方はさっきのを見てはいなかったのですか！！この者は十分近

衛隊には十分の実力です！」

姫は玉座の横にいたのにズイッと前に出て反論している。

そんなに自分が欲しいいんかな？

とその様子を見守る。

「見ましたがやはりこんなガキを近衛隊にいれるなどと・・・巫山戯ているのも大概にして欲しいですな」

とやれやれみたいに額を右手で拭いながらため息。

自分はそれを聞き、潰そうと立ち上が・・・

「巫山戯る？この人を馬鹿にするのはわたしが許しません！！」
立ち上がれなかった。

なんとなく視線を玉座にいるおっさんの方に視線を向ける。

「はぁ・・・」

ため息を着いていた。しかもこっから見て取れるぐらいに眉を潜めている。

それからすぐに息を吸い込んで

「大概にしておけ！」

と怒鳴ってくれた。かっこよかった。

「だってそうでしょう！！こんなガキを！！」「黙れ」・・・」

喋っている声を妨げて黙れの声。王様だ。

「お前は王に逆らうのか」

呆れたようにゆっくりとおっさんの方を見て言う。

自分もおっさんの方に顔を向ける。

「くっ！・・・しかし・・・」

言葉が詰まっている。あ、こりゃ負けだな。声で負けてる。

内心ほくそ笑む俺。

「しかしもあるか！王が言っている事に逆らうのか？」

いいぞ！王様！あとは押すだけだ！

内心応援をする。

「・・・すみませんでした陛下。お許しを・・・」
見て取れる。こいつ絶対嫌々言ってるやがる・・・

そういつておっさんは後ろに下がった。

「よろしい。・・・ではエリオーシュよ。本当によいのだな？」

「はい」

即答だった。言い切った瞬間にはいつて答えた。俺の友人もびつくりの即答だな。

「ではこれにて終わりとする・・・解散だ」

王様は立ち上がりながら解散といった。

『はっ！！』

と何人もの声が聞こえる。左右の壁に結構たくさんの方がいたからね。

左右にいた人達は壁にそって後ろの出口に並んで出て行く。

しばらくする王様と姫だけがこの部屋に残っていた。

「・・・」

自分はなんとなく左右をキョロキョロと見る。

「おい、貴殿の名前は何という？」

いきなり声がかけられたので少しびっくりした。

「あ、義也です」

こんな感じにしておけば大丈夫だと思う。

「そうか・・・ヨシやか、いい名前だ」

といってそそくさと玉座の後ろに下がっていた。

「ふう・・・」

疲れた・・・こんなの校長先生の話ぐらい疲れた。

自分は足が軽くしびれた為に立ち上がって背伸びをする。

「ああ・・・と」

いい感じにコキッと骨が鳴ったので上にあげていた腕を降ろす・・・いい気持ちだ。

背伸びをしたあとにずっと立っているであろう姫に視線を向ける。

「・・・」

カツカツと甲高い音を上げながら自分の方に何か早足で来る。

「あ、どうしま・・・」

喋っていた言葉が止まる、ついでに思考が止まる。

あ、止まってる理由？簡単さ。

「・・・・・・・・」

姫が無言で抱きついて来ているんだよ。あ、自分は女の人に抱きつかれた経験はまずないので思考が完全にストップしました。

「え・・・・・・・・どうしました？」

止まってる頭でなんとか言葉を捻り出して口に出す。

姫はそれには応じずにより強く抱きしめて来る。

・・・・内心はグエツてなるぐらい強く抱きつかれてるがそれは絶対に口には出さない・・・・っていうか出せない。

「どどどどうしました？」

どもった。それでも俺はチキンなのでね。

「とても・・・・とても心配したんですよ！？」

抱きついていて手を俺の肩に置いてブンブンと振る。

こんな振られてるからかなんだか知らんが何も考えられん。

「大丈夫ですってば・・・・もう止め・・・・て」

軽く頭の比例してブンブンなっているので軽く気持ち悪くなって来た。

「あ！すいません・・・・大丈夫ですか？」

俺を揺すっていた手をピタッと止める。

しかし頭は完璧にまだ揺れてる。しかしここは我慢だ、俺！

と少し気持ち悪くなったけど耐えて姫の方をみる。

・・・・今気がついたけど姫ドレスなんね。

髪はストレートの銀で白いドレス。汚れやすいはずの白が完璧に綺麗だ。

「ああ・・・・大丈夫で御座いますよ？」

・・・・頭が軽く揺れてるから変な敬語が出てしまうぜ。

「だから敬語じゃなくてもいいって言ってるでしょう？」

OK OK ちょっと待ってね・・・
よし。

「エリーでいっか？」

エリオーシュって言い難いからね。短縮でいいんじゃない？と考えた結果で御座い。

するとどうだ、顔が真っ赤。何が起きた？

「は、はい！大丈夫で、す」

一瞬で落ち着いたようだね。よし、承諾は得られた。

「あ、そうだ。近衛隊って何人居るんですか？」

と疑問をぶつける。

挨拶ぐらいはしとかなないとね。日本人の几帳面さを見せてやる。

「・・・残念ながらいません」

「残念ながらいませんか？なんで？」

これは驚きだ。聞かなくてはいいけん。

「それは・・・」

エリーが話し始めた。

あー・・・話し始めたんだんだけど結構長かったので省略してお伝えするよ。

近衛隊っていうのは結構強いやつを入れるはずなんだけどゼル・・・黒髪だな。

黒髪が昔からやっていてくれたんだと。それで入れる際には黒髪が入りたい奴と戦って勝った奴ははいれるんだって。

しかし勝った奴が一人もいなかったのだから今までは居なくて今回俺が黒髪を倒したりしたから近衛隊にいられたんだってね。

説明終わり。

「って感じです」

何か申し訳なさそうに肩を窄めてる。カワイー・・・じゃなくて。

「じゃあどうするんですか？一人でもいいんですか？」

これは俺に取って重要な質問である。

まさか一人でやるってなったらたいへんやん？

「・・・あー・・・それはヨシヤが探してくれませんか？」

少々の無言のあとそう言って来た。

「え？いいので？自分はあるまし人を見る目はありませんよ？」

確かに俺には人を見る目があるとは思わないがね・・・

「あ、大丈夫ですよ？時間をかけていただいても・・・」

おう・・・それはありがたいぜ。いきなし集めろって言われるんか
と思ったぜ・・・

「あー・・・そうですか・・・もう自分って立ち歩いて大丈夫なん
ですか？」

これが一番の疑問。探せと言われて外を歩けなかったら元も子もな
いもんね。

姫は顎に手をやって、んー・・・って考えてる。

それも可愛い。

しかし言葉には出さない。恥ずかしいから。

「多分大丈夫だともいいます・・・よ？でも貴方をあまり快く思わ
ない人達もいるとは思いますが・・・」

少し信憑性に欠けるけどまあ大丈夫だろう。

「大丈夫ですよ。自分はそう簡単にはやられませんから」

取り合えずこう言うっておけばいいだろう。

面白そうだからもう探しに行こうかな。

取り合えず太陽は出てるし、まだいけんべ。

さっそく行こうと姫に背を向けて扉を目指す。

「あ、お気をつけてくださいね！」

そんな声が聞こえる。

その声に答えるように振り返らず手だけ振って扉を開ける。

しかし自分は馬鹿な事をしてしまった。

完璧にお腹が減って居る事に。

俺でいいんで？（後書き）

んー・・・文書くのは難しいな・・・

キザとメイドさんと。

絶望した。

今のお腹の減りように絶望した。

こんな絶望小6の時のキャンプの日に一人だけ休んだ時の絶望感とどっちがデカイ？みたいなことがさっきから頭の中をぐるぐると回っている。

結論から言おう。

「腹が減った・・・」

その通り、ご名答だ。

お腹が減ったのだ。結構な時間食べてない気がする。

「おおおお・・・」

ドツとそばにあった壁に体を預ける。

グロロロ・・・

大変だ、腹の虫を通り越して猛獣がでて来やがった。

さっき姫のところから歩いて少しは経ったかと思ったが・・・

「広すぎるぞ・・・」

壁に体を預けながらそう呟く。

本当にでかいのだ。うちの中学校が多分20は入るだろうと考えてしまうぐらいの広さだ。

たった少し歩いただけでドツと疲れる。今向いてる廊下だって目を凝らさなければ端っこがみえないくらい長い。

なぜ自分がこんなところを歩いているかって？

それはね・・・なんと云いますか・・・恥ずかしかった。

俺は女の人に気を使われた覚えはあまりない。

あ、嫌われていたわけじゃないと思う・・・よ。

そして理由はもう一つあります・・・迷子です。ええ、迷子です。

自分はそのままで方向感覚は悪いとは思わないがね・・・これはデカ過ぎるんじゃないですかい？先が見えない廊下なんてみたことない

よ・・・呼び出しとかしてくれねえかな・・・

「よとと・・・」

とりあえず暫し壁に預けていた体を立ち上がらせる。
歩いてみんやーどうにもならん。

「なんかなかったか・・・」

とりあえず基準服に何かあるか探ってみる・・・結果何もありませんでした。

どうしようか・・・

「・・・」

無言であたりを見回す・・・あるのは人が一人もいない、いろんな形の扉がある長い廊下だけだ。

「じゃあなし、か」

ため息をついて先の見えない廊下を一人で歩き始めた。

「誠に申し訳御座いませんでした!!」

「ん？」

とても長い廊下の端っこに到着し、何か左右に道が別れている廊下をどっちに行こうか考えている時に謝罪の言葉が右のルートから聞こえて来た。

するとそこには子供・・・と言っても俺よか年上かもしれない人たちが沢山歩いていた。

その通路ど真ん中で女の人（メイド服）きっかり九十度お辞儀を何やらマントを着ている髪の赤い男に謝っている。

気になったので曲がり角のところに市原なんとかさんみたいに顔を出して見物する。

「本当に申し訳ありませんでした!」

「申し訳ない? ふざけるな! この僕の大切なマントを汚すとはこの平民が!!」

何度もペコペコしているメイド服の人を赤い髪の奴が怒声を浴びせている。

「この学校でトップであるこの僕のマントを汚すとはいいい覚悟じゃないか？」

とキザったらしい声としゃべり方とセリフ。

「あの有名な炎騎士隊に入隊するんだぞ僕は！」

なんか途中から自慢になってるし・・・あれ？炎騎士隊？確か何時間か前に一撃で俺がKOした隊長がいるところかな・・・

「そんな僕に水をかけるとはこれだから平民はいけないね・・・」と見下した超上から目線。なんかやれやれってため息してるし。

・・・水をかける？・・・ああそう言うことか。

と二人が立っている足元を見る・・・答えを発見した。

足元には水たまり、桶・・・みたいな壺みたいな容器と赤い髪の濡れているマント。

多分何かの拍子にあれに入っていた水が零れたんだと思う。

「あやや・・・大変なことだねーか」

と呟きながら二人の方に視線を戻す。

未だにペチャクチャ言っている赤い髪。それを立ったまま縮こまって聞いているメイドさん。

・・・助けるっきゃないんじゃないか？何かいいことありそう。

「よし！」

と頭だけを出していた体を全部出してそっちの方に向かうのであった。

段々と距離を詰める俺。何かその周りにいる見た感じ学生みたいな人達は俺がそっちに行っているのを何か疑問を持っているような顔でみんなしてこっちを凝視。

赤い髪は気がついていない様子。

と考えているうちに二人に辿りついた。

そばに俺がいるのに赤い髪の奴は一切こちらを見ない。

「あの！すいません・・・」

「何だ？今取り込んでるのでね後にしてくれ」

とパツとこつちを向いて口を開いたかと思うと又メイドさんの方に顔を向ける。

一瞬メイドさんもこつちを目で見えてすぐにしたを向いてしまう。

毒舌を解放してみようか・・・いや、まだだね。もう一度トライだ。

「あの・・・」

「五月蠅いな！この僕に何か用でも在るのか？この学園トップの僕に！」

言葉を遮りどこまでもキザに喋ってくる。・・・よし顔をこつちに向けたようだし・・・始めるとするか

「はい、あなた様に用が在るんで御座います・・・この自意識過剰野郎が・・・」

最初は優しく後から落とすってね・・・

「な、なんだと！？」

驚き半分、怒り半分で吃った。よし宴だ。

「この僕が自意識過剰だって！？学園トップの能力を持つこの僕が？！」

「ああそうだ。自意識過剰でキザったらしい学園トップさん？」

完璧に怒りを誘う言い方で。

「こんな事ぐらい水に流せないのか？」

「流せるわけじゃないか！この学園トップのこの僕に水を掛けたんだぞ！？」

あー・・・うるさい奴だな・・・

今ちらっと見たが周りの人達はこつちを見て何か笑ってる。

「たかが水だろ？そんなもの掛けられただけでか？小っちゃい男だねえ」

「・・・このメイドを助けると言う事はお前も平民だな？」

こめかみに思いつきり筋がでてるけど冷静に話してる。

「平民？そうだね自分は平民さ！だがね女の子にそこまで怒るような下衆じゃあないね」

平民がなんだってんだ？俺は市民だったけどね。

「下衆！？この僕が下衆だって！？」

と唾を飛ばしながら言ってくる。一度もバカにされた事のないボンボンが・・・あ、調子がいいな。

「ああそうさ！女の子にネチネチネチネチ・・・頭平気ですか？」挑発がてら頭をコンコンと叩く。

「・・・そうかその女を庇うか・・・そうか」とプルプルしつつポツポツと呟いている。

隣ではメイドさんが目を丸くしてこっちを見ている。まあそりやそうか。

「ならばお前に制裁を下してやる！！中庭に来い！！」

・・・回れ右して行っちゃった。

あ、周りの奴らがそいつに着いて行った。

「ああスッキリしたー」

んゝとその場で背伸びをする。

ふと横をみるとメイドさんが固まってる。

「あ、貴方何をやっているのですか！？」

と黒い肩ぐらいまでの髪と黒目の女の子が顔を真っ青にしながらずいっとこっちに寄って来た。

「何を？あの下衆をバカにしたまですが・・・それがどうしました？」

「どうしましたじゃありませんよ！？貴方正気ですか！？」

セリフを言い切った瞬間にセリフを言うとは・・・

「はい？自分が正気かって？」

と冷静に聞き返す。

「はい！そう聞いたんです・・・ああ大変だ・・・」

セリフを言い切るとその場に座り込んでしまった。

「自分は正気だよ？いやああの下衆がふざけた事抜かしてるからさー」

「大変ですよ・・・あんな啖呵を切ったりして・・・」

話してはくれるがしたを向いたままだ。

「あ、中庭って何処かな？」

場所を知らなかったため聞いてみる。

「対抗なんて辞めてください・・・ただではすみません・・・」
ありやりや下を向いたまんまだ。

「対抗？対抗なんてしないさ」

と冷静に答える。するとぼつと立ち上がったメイドさん。

「対抗なんてできるわけありません！なんであんな事を！？」

まあそうなるわな。普通。

「だからさ自分は対抗はしないと云ってるのさ・・・自分がするのはもうあんな事をさせない様に軽く罰を与えておこうかと思っ
ね」

と言ったら何言ってるのこいつみたいな目を向けられた。

「はぁ・・・もう知りませんよ」

と歩き始めたメイドさんの後に着いて行く事にした。

「逃げなかった様だな平民！！」

どっかで聞いた事が在る様なフレーズだな・・・

とめんどくさそうにため息をついてみる。

無事に中庭らしき場所に着いてその中庭の真ん中に赤い髪は立っ
ていた手には杖らしきものを持っている。

本当にファンタジーだな・・・

「ああ来てやったぜ自意識過剰男？」

男の前20メートルぐらいまで歩いて行き、毒舌。

現在空腹につき、絶好調だ。

「もう覚悟ができている様だな平民！」

と杖を前に出している。微妙に口が動いているがわからないな。

「無礼な平民に名乗る名前は無い！」

「いらねえよ下衆の名前なんて・・・知りたくもないね」

ハッと鼻で答える。

すると周りを取り囲んでいた人たちがザワザワとしている。

「それでは制裁を下してやる！！」

「それはどうもー」

さらに前に赤い髪の奴は杖を前に、俺に向かって構えた。

「ファイアボール！」

と言った男の杖から直径二メートルほどの火の玉を出して来た。
さあどうするか？

もうあと少しで到着する火の玉。

「ゴットハンド！」

黄色の半透明な大きい右手を召喚し火の玉を止める事にするぜ。

「せい！」

ドオン！

何故だか当たった音がする。

火の玉は大きい右手に当たった。自分はそれを止める！

「ほっ！！」

足に力を入れ踏みとどまる・・・

大きい手を出してはいるが何か熱は遮断できてないらしい。

シューウウウウ・・・

何やら火の玉は煙を出して消えた・・・

円堂すごいな・・・こんなんでもボール止めてたんだ・・・

と考えていたがその考えを捨て赤い髪の方をみる。

口を開いてこっちを見ながら固まっている。

「ふう・・・」

ゴットハンドを消して赤い髪の方に歩き出す。

それを赤い髪は気がついたのか次の行動に移そうとしている。

「フレアゴーレムよ！」

と呪文らしき言葉・・・と言うか口しか見えてなかったけど多分言
ったのだらうね。

ドン！

とこんどは火の玉を一斉に3発赤い髪の前に出す。

「ほへー・・・」

と歩きながらもその光景に驚いた。

その光景とは火の玉が変形して人型になった。

「ははは！！！！これで僕は負けはしない！！」

とかほざいてる。

周りの人もざわついている。

しかしそれが運の尽きってね・・・

自分は歩きながらも右手を天に向ける。よし。

「送る鐘の音」

ズウン・・・

景色がグニャッて穴が空いてその中から青白い色の大きな玉が出て来た。

それが三体いたフレアゴーレムに当たった瞬間、消え去った。さっきと同じ音を立てて穴に消えて行った。

・・・ウォ！スゲえや！さすがは闇の紋章だな・・・

「・・・」

視線を赤い髪に戻すと地面に腰を下ろして後ずさっていた。

あともうちょいで足元に着きそうだね。さっきまでの威勢は何処に消えたんだろうね・・・

「お、お前は何者だ！？」

と後ずさりながら自分の正体を聞いてくる。

「んっ・・・そだねー」

と喋りながら赤い髪の足元まで移動する。

それでも後ずさるのでそれに合わせ距離を詰める。

・・・自分は・・・ああそうか。

「自分はこの国のお姫様の近衛隊だよ」

これで間違いは無いと思う。

「ひっ……」

と後ずさるのは何なんだ。さっきの威勢は何処に行った。

「取り敢えず俺の勝ちみたいだね……もうあんなことすんなよ……」

と耳元でボソツと言う。

それを言い切ったあと立ち上がってくるツと後ろを向いても来たルートを戻って行く。

後ろで聞こえるザワザワ声を聞きながら。

戻りながら時計を見ると四時ぐら이었다った。

あれ？おかしいな？さっきは昼頃だと思ったんだけどな？

とか考えながら戻るとメイドさんが居た。

「おーい？メイドさん？」

と軽く声をかける。

「……はい?!」

少し間が空いてからそう答えた。

「そんなに驚きかね？」

自分にしてみれば楽しかったけど。

「驚きですよ!？貴方本当に平民ですか!？」

声を張り上げるメイドさん。

「あー……俺は平民……だと思う「あんな強くて平民な訳がありますか!？」そうなの?」

真っ向から否定された。

それに何かどんどん近づいて来る。

「わかったから……さ?」

少し下がる。こんなに近くにこられた事ないからさ……

「平民な訳がありません!変な魔法を使っておいて!」

魔法……魔法か?あれとかあれとか?と暫し考える。

「よし、わかった。正体を言おう。」

食べ物を食べている時はお静かに。 (前書き)

明日は大会だぜ。ヒヤッハー！

食べ物を食べている時はお静かに。

[illegible]

甲高い声が廊下に響き渡る。・・・何だか遠くに見える人達がこつちに振り向いてる。

急いでメイドさんの口を塞ぐ。目立つから。

「そんな大声出さなくつてもよくね?！」

突然の大声に少しびっくりして裏返った声が出てたぜ。

メイドさんの口を塞いだ手を退けるとすぐさま深呼吸をしたのちにまだびっくりの表情をこっちに向けてくるぜ。

「だって近衛隊ですよ!?! だから学園トップを倒せたんですね!?!」

・ ・ ・ わざわざ顔を近づけなくてもいいと思うんだが。

「だってと言われましても近衛兵がただけ高い地位にいるか自分には検討もつかないんだが？」

取り敢えず今思つた疑問を聞いてみる。・・・兵の位の高さなんぞ中坊にわかる訳ないと思つたり。

それを聞いた瞬間メイドさんは、何を言ってるんだこいつは？みた
いな表情をした。

「……え？今なんと言いましたか？」

現実を直視出来なかったのか質問を質問で返してきました。

いっただろう何度も言っでやるともさ。

「だからさ？どん位偉いん？」

「五隊長のトップですよ！？近衛隊って！？その近衛隊に入るのはどれだけすごい事か？！」

・・・腕を最大限に使って凄さを表そうとしているらしいが途轍もなく可愛い。

「ほへ」

簡単な答えを返す・・・一歩間違えば殴られそうな感じになってしまった。

その返答を聞いてメイドさんはガツクリと首を下にやった。

「ほへーって・・・すごいんですよ？」

呆れた様に言ってくる。そうなるわな。

「そういわれてもねーよーわからんぜ？そんなもの？」

本当に凄いつて言われても中坊にゃーわかるまい。

メイドさんはガツクリと落とした顔をこっちに向けて来る・・・その少しのため息はなんだ。

「そんな知識この学園で教わったでしょう？」

「・・・んな事言われても知らんぞ。うちの国にはそんな制度はないしの。」

「知らんよ？13の俺にはそんな知識は持ち合わせておりませんよ。」

思った事は素直にいう事が大切。確か爺が言って居た気がする。

なんだか動いて居たメイドさんがピシッと止まった。

「・・・何か悪い事したかいね？」

「え？・・・え？十三歳？え？」

「・・・信じられないのかこの歳が。なぜそこで止まるんだ。」

「・・・は？何歳だと思ったの？」

自分もそんな事を聞かれたので少しフリーズした・・・毎度の事なんだけどね。

「・・・18ぐらい？」

と遠慮がちに・・・って何を遠慮してるんだこの人は？

「ずいぶんと高いお年でござ居ますね？」

確かに「年上に見えたー」とか言われるけどさそこまではいかんのです。

軽くびっくりしたのでメイドさんのおでこにデコピンを与える。

ピシッ

「あう」

と一瞬よろめいたメイドさん。・・・いいあたり具合だった。

すると額を片手で抑えながらこっちを見てくる。

「……ここで涙目だとポイント高いんだけどな。」

「痛いじゃないですか?!」

「だって……ねえ?」

そんなこと言われてもなんとなくだから仕方ないぜ。

「あ、そいじゃあ君はいくつよ?」

自分の年齢を聞いて来たのだからそっちも言わなきゃ割に合わないべ?

「……失礼だって?……なんの事でしょ?

するとメイドさんは少し顔を顰める

「……そんなに聞かれたくないのかね?

取り敢えず聞きたいので待ってみる。

「「……」」

互いに無言。しかしお互いの考えてることは全く違う。

メイドさんは観念したのか深いため息をつき自分の方を見据えた。

「……15ですっ……よ?」

「いや聞かれても答えようがないねんけど。」

「……なんで会う人は全員年上?まあいいんだけどさ。」

どうすっべ?何か聞きたいことはあったかな。

「……あ、そうだメイドさん?」

とりあえず思いついたことは聞いてみる。

「は、はい?何でしょう?」

「敬語……要らなくね?年上なんだし。」

自分は年上に丁寧語はそんなに使われた経験がないというかなんというか……こう違和感が残る。

「自分もあんましに敬語なんて使い慣れてないんでね、お願い!」

自分は両手を合わせ少し頭を下げる。お願いのポーズ。

「わかりましたから!頭をあげてくださいってば!」

「はあい」

ダメだったか?……取り敢えず頭を上げる事にしようか。

「私はこれが素なので許してくれませんか？」

申し訳なさそうに頭を下げるメイドさん。……
それも正直グツと来る気がする。

「んゝそかそか……あ、メイドさん？」

「何でしょう？」

自分は少し間を開ける。よし。

ギュルルルル……

「何か食べ物ないかな？」

いいタイミングでなった。

「……ふふっいいですよ？」

少し微笑んで承諾してくれた。

またかなり歩き自分たちはどこかの部屋の前に来た。

するとメイドさんは立ち止まった。ここがお目当ての所か？

キョロキョロしている自分にメイドさんは微笑んできた。

「ここで待つて居てくださいね？」

メイドさんは自分を残して扉の中に入って行った。

ここは何やらご飯を作るところらしい。間違いなく厨房だ。さつきから何やら扉の中からドタバタと音がする。そして何より

「旨そうな匂いがする」

……これは何か？お腹空いている自分への当てつけか？焦らしか？
取り敢えず迫り来る腹へりの感覚を紛らわすためにあたりを見回す。
目の前にはいい匂いがして来る扉。周りは廊下。自分の背後には何
やら学校の渡り廊下の真ん中にある外に出られる所。

そこから太陽の光がさんと降り注ぐ。……かなり暑い。

「んゝっとな……」

自分は伸びをしてその光が来ている外に出て見る事のした。……

察するに何かを運んで来る、外から運んで来たものを入れる場所なのだろうかね。

「ふう……」

取り敢えず外に出て壁に寄りかかってあたりを見回す。

……何やらあたり一面に花壇っぽいものがあるのは分かった。それらの花々が少し風になびいてサワサワと音を鳴らしている。しかしだ。待って来れ。一つ解せないぞ。

「見た事ねえ……」

よくよく目を細めて見てみると自分が見た事がない花が沢山。

それもあり色とりどりの見た事がない花ばっかだ。

赤から青から……あ、ピンクまである。

「はぁ……」

ため息。

「やっぱりここは地球じゃないのか……」

それだけで断定出来ないかもしれない。しかし自分が見た事もない花とか魔法とかバケモンとか。

地球には、ない。

見た事もない、聞いた事もない人種。聞いた事のない国名。自分の死。神の存在。力。

取り敢えずそんな事を考える。

「考えても仕方ない……な」

上を向いてボソリとつぶやく。

「何を考えてるんですか？」

不意に横からの声に顔を向ける。

メイドさんは何時の間にか横に居た。

「ああ……なんでもないっス」

少し気恥づかしくなったので顔を反らす。

「ふふっ……食べ物是要らないのですか？」

そうだった、食べ物をもらいに行ってたんだ。忘れてたぜ。

メイドさんの手には皿に乗った何やらライ麦的な結構大きいパン。とっても旨そうに焼けてるっぽい。

「要ります！・・・メイドさんは食べないの？」

それを手に取り半分に分けて割ろうとする。

「あっ！いいですよ」

承諾は得られた。よし食べよう！

「頂きまーす」

と貰ったライ麦的なパンを齧ろうと顔を近づける。

「待て！平民！」

齧れなかった。

取り敢えず声ができる方に顔を向ける。

そこには何かカッコつけたさっきのキザが立っている。距離にして10メートルつてとこ。

「んだよ・・・こっちは食事中だ」

少し不機嫌になったが飯が先だ。

「さっきはよくも僕をけなしてくれたね・・・」

・・・何を言うておるんだ？

「君みたいな平民が近衛隊だって？嘘を抜かすなよ」

・・・アホか。

取り敢えず知らん顔してパンを見つめる。

「さっき負けたのは僕が加減をしてあげたからだよ」

その言葉に見つめている目をパンからキザに向ける。

「あれは君に花をもたせる為にやってあげたんだよ・・・そんな事で勝った気になってるなんてね」

とわかりやすく笑うキザ。

取り敢えず無言で隣にいるメイドさんをチラッとみる。

「・・・」

無言だけど苦笑い。あんなものを見てはそうなるよね。

「メイドさん中で食べよ？」

とうざったくなくて手を引っ張って移動しようとする。

「は、はい」

一緒に中にはいる為に体を動かす。

もうちょっとで中に入れる。

ドォン！！！！

「うわっ・・・」

「キャッ！」

何やらさっき迄居た壁に魔法をぶつけてきたっぽい。

「逃げるのかい？平民は弱虫だから困る！」

「喧嘩売ってんのかテメェ・・・」

もう切れた。ウザい。

「メイドさんはこれ持ってちよっと下がってて？」

とメイドさんにパンを渡す。

「はい・・・」

サッと後ろに下がったメイドさん。

よし。

「喧嘩を売っていると見て間違いないな？」

ドス低い声でキザを睨み歩みを進める。

するとキザは少し間を開けた。

「ああ平民。」

キザはニヤリと笑ってそう言った。

さあ処刑開始だ。

ある程度の距離をとって武器を召喚する。

名前は覚えていないが・・・確かFFの兄さんがいる人。その人の武器をお借りする。

シャン

武器を振るう。剣なのか槍なのか分からないが・・・槍かな？

「武器を使うのかい？」

何時の間にか杖を構えながらそうつぶやくキザ。

距離にして・・・分かんが結構近いからイケるか？

「ああ処刑だ。痛いのは我慢しろよ」

ブンブン振りながら言う。

「分かった。なら君からやらせてあげるよ」

と杖を下ろしたキザ。

それが運の尽きだ。

自分はグッと踏み込んで剣を構える。

キザは構えない。

「闇よ」

と剣の先端をキザの腹めがけて突く。出が速いから・・・

当たった。

当たったと同時にがががと音がする。ゲームだここは連打しているところね。

「魂の叫びを」

左手に何やら青黒い球状の物を当てる

ドォン！！！！

そんな音を出し豪快に吹っ飛ぶキザ。

地面に何回もバウンドしながらも止まった。

こっから見て動かないので武器を消して近づいてみる。

「くはっ・・・」

「だいぶ虫の息ではないか」

倒れているキザの前迄きて見下ろす、否見下す。

「・・・これ以上何かして来るんなら次はないぞ」

とため息を尽きながら技を出す。

「ディアラハン」

パァァ・・・

取り敢えず技をかけたのを確認してメイドさんの方に向かう。

一仕事終えたあとのパンはとても美味しかった。超堅かったけどね。

食べ物を食べている時はお静かに。 (後書き)

感想など下さったら幸いです。

ビックリだよ！（前書き）

とても長かったテスト勉強、
and テスト・・・
しかし今日で終わりだー！

ビックリだよ！

えー・・・今現在の様子をお知らせします。
只今メイドさんと一緒に行動しております。

あの戦いのあとに色々と喋っていたので知らない間に夜になっていたんだぜ。

取り合えず報告終わりだ。

「メイドさん？ここかい？」

自分は目の前にある大きな扉を指差す。

「はいココです」

メイドさんは扉を指差して言うてくれた。

只今いる大きな扉は姫さま、もといエリーの部屋だそうです。

・・・取り合えず日本の建築ではないね。

まあ何やら木で出来た大きい扉はまだ納得出来る。

しかし、どうだろうか？

「こんな大きいんすねこの城の扉って？」

大きさは目測でみると・・・高さが3mくらいで横が2mくらいって感じ。

「そうですか？」

何やらとても不思議そうな顔してる。

「自分の国の扉はここまで豪勢ではないですからね」

日本・・・狭いしね？

「そうなんですか・・・」

首を傾げて考えてるっぽい。

「あ」

と、急に思い出したかのように手をポンと叩いたメイドさん。

「どうかしました？」

仕事でも残ってんのかな？

「あ、はい。まだ仕事が残ってて・・・」
正解だったようだ。

でも何やら『仕事』って言葉を強調した気がする・・・？

「取り合えずこれで失礼します」

ペコッと一礼してから走り出して行った。

「なんだったんだろ？」

気にはなったが取り合えず入るか。

自分は扉に手を掛けた。

ガチャ

重そうだったのになんだかとても軽く開いた。内開きタイプでした。

「只今戻りました？」

疑問系になってしまいうのはご愛嬌だぜ。

「あ、ヨシヤ！」

何やら椅子に座っていたらしく立ち上がって来てくれました。

格好は何やら前に見た格好だった。なんかすぐに戦えるぞって感じ。

「疲れましたよー」

扉を閉める。

「待ってたんですよ？」

ああそうか報告が残ってたか。

「あ、取り合えず今日は見つかりませんでしたよメンバー」
本当に見つからなかった。

「まあそれはそうですよ・・・あ、座ります？」

多分疲れたの言葉からかな？

「あ、はい。お言葉に甘えて」

取り合えず椅子に向かった。

「それにしても大きい部屋ですねえ」

と自分は椅子に座って部屋を見渡す。

むっちゃでかい部屋だ。目測だけでも一辺が20くらいありそうな感じの部屋。

窓ってゆうかテラス？がある。

それに今座ってる椅子とかテーブルとかの近くに大きなベッドとかがある。

「そうですか・・・大きいですか」

と何やら思いつめたような顔をしてる。

「あ、でもなんで真ん中にテーブルとか置かないんです？」
思いついたことを聞く。

「あ、いやなんか落ち着かなくてですね」
としたを向いてしまわれた。

日本人気質だな。

「へー・・・あ、そうだ質問いいですか？」

質問を思いついた。

「は、はい？なんででしょうか」

パツとこっちに顔を向けるエリーさん。

「ここって何なんですか？」

これは重要な質問。

「ここは城と魔法学校が一緒にあるこの辺りの国では珍しい城です？」

「いや、疑問系で聞かれても・・・」

その通りだ。

「じゃあ学生はどうなってるんですか？」

これも気になる。

「学生ですか？学生は城にある寮で生活してますね・・・それから時間になったら城の中に有る教室に行く・・・といった感じです。それからこの学生は基本的に3年ぐらいはいてその中から五つの騎士隊に入るといった形になります」

・・・学校なんだね。

「あ、魔法ってどのぐらいの種類が有るんですか？」

これも気になる。

「魔法ですか？魔法は大きく分けて炎、水、風、土、雷ぐらいですかね？それにあと余り知られていませんが闇、光、時ですかね？」

「そうなんですか……」

めっちゃ興味深い……けど

「エリーさん？」

「は、はい？何でしょう？」

今自分が感じているのは人間の欲求。

「眠い場合はどうしたらいいでしょう？」

睡眠です。

「そうですね、大変でしたしね……」

と辺りをキョロキョロと身始めた。

「取り合えず床でも大丈夫なんで基本的に自分は」

俺は床でもあれば大抵眠れる自身がある。

「いや、そういう訳には……では……」

「では？」

「一緒に寝ましょう！」

「!？」

まさかそんな答えが帰ってくるとは思わなかった。

びっくりして椅子から跳び上がったしまったよ!？

「嫌ですか？」

「いやいやいやそうではなくてですね!？」

完璧に動揺してしまっている。

「じゃあ寝ましょう！」

えーっ!?!!

短い一休みと襲来者（前書き）

只今！！長い（自分的には）修学旅行から見事帰還いたしました！

短い一休みと襲来者

さあどうしようか・・・今ちよつと何か変な事になっているぞ。

自分はさつきエリーのところに帰ってきました、はい。

それで眠かったのどこで寝ればいいと聞きました、はい。

じゃあ一緒に寝ましょう！・・・はい？

「えー！？」

「え？嫌なんですか？」

という受け答えを三回ほど行っております。

律儀にも中々頭の回転が悪い自分に付き合ってもらってます。

「いやいやいや！・・・え？何故にそんな考えに移行するんで？」

本当にビックリだよ！・・・いや嬉しいんだけどさ！？

「え？だって寝るところが無いので・・・」

・・・何なんだよこの人・・・そんな的確に寝る場所を指示さなくたって分かりますよ？やめてくれ！そんな可愛らしい笑顔をしながら早くしてオーラをだすのは！

俺は負けないぞ！俺はまだ負けない！男としてのプライドが在るんだ！

「いやいやいや！しかしですね？一人用ベッドに二人というのは些か狭いのではないかな？」

これでどうだ?! これで少しは時間を稼げるはず!

「大丈夫です。ベッドは私一人では少し大きいので多分大丈夫です!」

稼げなかったー! 流石に王族は違うねー! さっきチラッと見えただけどベッドはかなり大きかったぞ!

「いやでもですね?! 俺は「くどいですよ? ヨシヤ?」・・・分かりました」

負けた。勝てないって・・・笑顔で寝ましょう! なんか言われたらさ?

「さあ早く!」

「分かりましたから腕を引っ張らないで?!」

腕をガツと掴まれベッドまで引っ張られてます・・・拒否権が無いのはわかってるけどー!

「お休みなさい・・・ヨシヤ」

「お、お休みなさい・・・」

只今ベッドに入って完璧に睡眠モードに突入しようとして居ます。主にエリーが。

俺はどうなんだって? ハハハ・・・考えてもみてくれよ?

むっちゃ美人でしかも自分のタイプにハマってる人が大きいとはいえ、ベッドの中で一緒に寝てるんだぜ

・・・寝れるか。バーロー。

「・・・すう・・・すう・・・」

「あ、もう寝てる」

只今エリーさんは安定した寝息を立てて居ります。

そんなにかんがえこんでいたんかね？

兎も角これで少しは心臓のバクバクは止まるかな・・・

「止まらねエてば・・・」

はい、止まるどころかなんだか早くなってるのは何なんだコンチクショー！

無理だよな？！タイプの人が隣で寝てるんだぜ？無理だってば！

「むー・・・」

「え？」

クルッと寝ている向きをこちらにむけて腕を自分の肩に持って行ってるのは何故だ？

グッ

「むー・・・」

「うぐえ・・・」

イタタタタタ！痛いってヴァ！

むー、何てかわいい事いいながらこの力はどこから！？

「ぐえエエ・・・」

何やらドンドン抱きつく力が強くなっている気が・・・！
まさかこの人は起きているのか！？

「・・・すう」

・・・おお？ やっと抱きつきを解除してくれたか・・・
解除してくれたのはいいけどさっきからの眠気が全てどっかに
行ってしまったぜ・・・

「ちよつと外に出るか・・・」

外の空気つつうか廊下の空気を吸いにくかね・・・つと

ガチャ

そんな音とともに扉を閉じると涼しい風が廊下を吹いていった。
さっきので完璧に目が冴えてしまったので涼みに来た。

「ほへー・・・」

自分は廊下を見る。

この辺りの廊下・・・って言うよりこの城の廊下はでかいね。
多分死ぬ前にいった事がある国会議事堂の廊下より広いんじゃない
かな、と自分は推測します。

「ふう・・・」

ふと目に止まった大きな窓に寄っかかる。

その空いた窓から涼しい風が入って来て、何やら鈴虫のような音が聞こえてくる。

やっぱり落ち着くねー・・・何の虫だかは知らんが虫の声を聞きながら風に当たる・・・

ビバ 日本の夏って感じがするね！あ、日本じゃねえか。

カツン

「んあ？」

そんな音がしたので音がした方を向く。

確かこのエリー部の部屋はかなり長い廊下の突き当たりだったと思うんだが・・・？

・・・んーよく見えないな・・・ならば！

「鷹の目」

フォン

そんな音がして視界の色がガラッと変わる。

確かこの能力は敵と味方を見分けられたりするんだよな・・・

「んー・・・」

音がした遠くの突き当たりの壁辺りを見る。

・・・確か体の淵が赤く現れるのが敵だったっけな。

「よし、鷹の目解除」

フォン

よし、どうするかね・・・
そうだ！

「おい！そこにいる人！出て来なよ！」

廊下が響くのを利用して大きな声で叫ぶぜ！
・・・多分馬鹿だと思われるだろうがそんな事は気にしない気にしない。

「あらら・・・反応なし」

そりゃあそうか？・・・そりゃあそうだ。
ともあれそれではこっちから攻め・・・る？

「ん？何だ・・・」

あれれ？なんか違和感がある気がするっ！？

カッ！

「うわぁ！」

何かが見事自分の頬すれすれを飛んで来た・・・怖っ！
何かが飛んで来たので後ろを振り返って見る。

「ん？ナイフ？まさかあんな距離からか？」

ナイフでした。

ものすごい細身の刃に何の装飾のない柄・・・十字架みたいなナイフ・・・って言うより小刀かな？
それならばいいぜ！

「よいしょ」

後ろに刺さったナイフを抜いて、学生服の袖を両方とも捲って・・・
いざ！

「・・・痛いなやっぱし」

手にとったナイフで左掌の側面をサッと一切りする。
・・・いや先に断るのを忘れていたが俺は自傷行為をして喜ぶような男じゃないぜ？

本当にMじゃないからね？・・・気を取り直して！

「『ウッドペッカー』・・・」

血が帯の様に動いて掌に集まる・・・行くぜ！

「『ガンタガン』！！！！」

ドン！！

「どうだ？」

当たったかな？・・・おわあ！

カカカツ！！

ナイフが今度は3本自分に向けて飛んで来たのでギリギリを避ける。
・・・多分あと数センチズレてたら肩に刺さってたなー

「・・・よろしい、ならば戦争だ」

本気を出そうかな！

これまた酷い返答ですねー・・・

短い一休みと襲来者（後書き）

感想などを頂けましたら光栄ですっというか待ってます！

確保劇（前書き）

すいませんでした。

待っていてくれる方がいたらとても申し訳ないです。

とても短いですがドウゾ。

確保劇

………とは言ったもののどうする？

多分走っても届かないし、第一近づこうとすればナイフが多分モロに刺さるであろう。

「仕方ないか！」

考えても仕方ない。

そう考えた自分はナイフが飛んでくる方向に走る準備をする。

……頭が変になったとかそんなわけじゃないですよ、多分。

「キングクリムゾン！」

相手に走り寄るといふ過程を消し飛ばして相手の目の前にいるという結果だけが残るッ！

そう言うわけで今相手の顔の前にいる。

まあ顔と言ってもなにやら着ているフード付きマントを着てる。色はちなみに黒だ。

「!？」

「ハァイ」

成功したよ、マジか。

良い能力だなこれ。

「クッ！」

反応早ッ！

自分でも動けなかったのにな。

一瞬の間で手が届かない範囲に動いたよ、あの人。

「……………」

何時の間にかだしていたと思われるナイフを俺の方にむけて絶賛警戒モード中になってる。

……………ってか何時の間にか出したよ？

「いいや、考えんのめんどくせえや」

自分はその人に向かい、構える。

構えると言っても武器は今持っていないが、ね。

拳さえあればいいのさ、多分！

「ハア！」

相手は一気に近づいて右手に持ったナイフによる攻撃を仕掛けてくる。

「これを待っていたぜ！」

ナイフを持っている手を右手で弾き

弾いた手を左手で肘を、右手で手首辺りを掴み

結構強く関節が曲がらない方向に一気に捻る。

「イツ……………！？」

「まだだ」

多少力を加減した蹴りを脇腹辺りに当て、距離を取る。

この戦い方はあれだ。

アサシンの拳での戦い方だ。

本来なら相手の武器を奪うところだけだね。

これはカウンターって事だ。

などと考えてるうちに相手は体制を立て直した様子。

けど右手を左手で抑えてるから結構痛いみたいだな。

それでもまだナイフを持ってるってことは諦めてないとみる。

「もう辞めませんか？」

取り合えず交渉からいってみよう。

「……………」

はい、無言ですね。

さてどうしようか？

今度こそ、捕獲。(前書き)

塾って何なんだろうか？

何だよ朝八時から六時って・・・拷問ッ？！

取り合えずドウゾ。

今度こそ、捕獲。

さっきカウンターしてから何分ぐらいかの睨み合いを現在進行形で続けております。

「……………」

さっきから見てるけどあの人ずっとナイフ構えたまま警戒してる。まあかく言う自分もしてるのですけど。

流石にさっきと同じカウンターは効かないだろう。完璧にあっちから攻めてくる気配がないと来た。

「……………」

さっきから何回か右手を抑えたり離したりを繰り返している。それで持ってゆっくりと左手を前に出して何時でも反撃可能な感じにしている。

「ん……………」

何となく声をあげて見る。

すると少し距離を離して投げれる、反撃出来るようにナイフを構えてくる。

……さっきから感じていたけどどっから出してるんだ？ナイフ。袖にも入ってない感じだし、懷に手を入れて出したわけでも無い。ナイフを入れておける様などころには一切手を触れてない。何故だろうね？

でもまあ考えても答えは出ませんけどね、解ってますよ？はい。

そう言えばさっきの構えが何かに似ていた様な気がするけど……
気のせいかな？気のせいだな。

などと考えてるうちにナイフが飛んで来る。

「ぬわあ！」

頑張って避けれたけど少し体制が崩れそうになる。
そこを狙ってか一気に近寄ってくる相手。

首を狙ってのナイフによる突き。

「くっ！」

それを後ろに跳んで避ける。

それを読んでいたかの様な追撃の攻撃。

「むがあ！」

追撃の突きを右腕で弾いて

隙を出来るだけでなくしての左後ろ回し蹴りを腹を狙って打つ。

しかしそれを綺麗に避けられる。

間を開けずに突っ込ん来る。

それにギリギリ反応しようとして両腕を前に出してカウンターの構えをする。

そこに丁度良く左手での突きがくる。

そのカウンターをしようとした。

ザシュツ

自分の左手に走る激痛。

「グアッ!？」

何なのか解らず後ろに一気に跳ぶ。

相手はそれを追撃せずに相手も後ろに下がった。

「くっ……」

左腕に走り続ける疼く様な激痛。

左腕に手をつけてみる。

すると液体を触った感じがする。

それを鼻に近づけてみて解った、血だ。

結構痛いってもんじゃない。

悶えそうなぐらいの激痛。

転んだ時に出来る傷の比じゃ無いぐらいに痛い。

現代っ子がこんな痛みを味わう事はそうはないぞ……

「……ケアルラ」

パアアア

回復魔法を左腕にかける。
すると痛みが抜けていく感じがする。

「ふう……」

何回か警戒しながら呼吸を整える。
落ちて着いた、うん落ちて着いたな。

「ぜりゃあ！」

距離を詰めての右殴り。
しかしこれはフェイント。

相手は冷静に受け流す体勢を取っている。

「ふっ！」

殴りをする瞬間に足を踏ん張って体勢を変えて左裏拳を出す。

「!?」

完璧に無理な体勢からの攻撃だけどッ！
視界が埋まれば多少雑でも大丈夫ッ！

ゴッ！

「くはっ!?」

丁度良く脇腹に入った裏拳。

そこに巻末入れずに右腕で反対側の脇腹を狙い、

ババババツ！！

電気を流す。

「キャアアアア？？！」

バタツと倒れる相手。

……卑怯って声は認めん！

取り合えず気絶したか顔を覗き込んだりして確認する。

「……」

よし、気絶してるハズだ。

「よいっしょ……っつと」

その人を担ぐ。

「さて、報告しに行きますかっつと」

エリーの部屋を目指して歩く。

今度こそ、捕獲。(後書き)

感想などをいただけたら幸いです。本当に。

俺的衝撃的事実発見（前書き）

投稿できちゃいました。

結構間が空いちゃってるので文やら口調が変かも知れませんが
でも頑張りました。

俺的衝撃的事実発見

「よっことせっと」

ずり落ちそうになったので肩にいる人を担ぎ直す。

「ただいまー」

開いている方の手で扉に手をかけて開ける。

すると、起きていたエリーがこっちに振り向く。

「どこに行っていたのですか？ ヨシヤ？ 心配しました……よ？」

俺の肩にいる人を見て喋っていた言葉を止めるエリー。

まあそれが正しいと思うぜ。

普通肩に人を乗つけて入ってくる人なんていないだろうしね。

「捕まえた」

俺は肩にいる人を指差して答える。

「捕まえた？ えっ？」

やはり混乱している様子である。ハッハー。

「あ、いやその。言い方がまずかったですかね？」

自分でもまずいとは思うぜ、うん。

「え？ 言い方ですか？」

さらに混乱させたようである。もうやめとくか。

流石にこれ以上混乱させるのはマズイ。

「何か危ない感じですが、この人は」
これまた指差してジェスチャー。

「危ない人ですか？」

危ない人です。多分。

「取り合えず降ろして差し上げたらどうですか？」

「ああ、そうですね」

降ろしてあげよう。

「よいしょ」

取り合えず部屋の中心に降ろしてあげる。以前に使ったすずらんテープを後ろ手にした所に巻く。
それと足首辺りにも幾重にも巻いておく。

「これぐらいで大丈夫かなって」

取り合えず一通り巻き終わったので最期に方結びをしてからエリーの方に振り返る。

「取り合えず説明しますね？」

「お願いします」

「はい。では、さっき自分はエリーが寝た後になんとか廊下に出ました」

「…続けてください」

「はい。それで廊下に出てみると、この人が襲ってきました」

「えっ?! 大丈夫なのですか!?!」

「大丈夫です。続けますよ」

「あ、はい」

「それで襲ってきたために戦って、捕まえて、この状況にいたるワケです」

「そう…ですか」

「そうです」

取り合えず話を一旦切って降ろした人の方を見る。

「武装をしたから少し苦戦しました」
本当に。切られたしね。
めっちゃ痛かったぜ。

「武装…ですか?」

「はい武装していましたね、と言ってもどこに隠してあるのかは分かりませんが…」

着ているマントを裏返しにしたりして確認する…お？

「うん、落ち着こうぜ？自分。」

あまりの驚きに一旦めくっていたマントを降ろして深呼吸する。

「よし、いざ」

気合を入れ直してマントを捲る。

そしてその下の左腕を確認する。

マントを降ろす。

「ん？大丈夫か？大丈夫だ。いけるぞ、自分」

何か意味のわからない自問自答をしまっているが気にしないでくれ。

「あの、ヨシヤ？」

心配そうにこちらを覗き込んでくるエリィ。

「大丈夫です。ちょっと待ってくださいお願いします」
これは待つて欲しい。本当に。

「え、はい」

下がってくれた。

「ふう…」

もう一度深呼吸。吸ってー、吐いてー、吸ってー、吐いてー。
よし、もう驚かないな？自分。うん。

「よし、いざ」

バサツとマントを捲る。

「……」

無言で左手を見る。

バサツ

降ろす。

「ふう……」

もう一度やるか？深呼吸？どうする？
やった方が良いかn

「ヨシヤ？何回そうやって捲る、降ろすを繰り返すつもりですか？」

「すみませんでした」

謝る。

「これ、最後にしますね」

「分かりました」

「よし…ふう」

一回だけでもう一度深呼吸してマントを捲る。
左手を見る。

「……」

無言で左手を掴んで手首を反らす。

シャキン！

何かでた。思ってた通りになんか出た。
飛び出た。刃が出た。

「何でこれがあるんだろうか」

アサシンブレードがこんな所に…？

俺的衝撃的事実発見（後書き）

出ちゃいました、暗殺者の剣。

仲間（前書き）

誤字脱字が有った場合は、ゴメンなさい。

仲間

「ねえよ」

ほんとにねえよ普通。

神様補正か何かなのか？

あっちの世界の物が来るのかよ？

「……やっぱり動くよな、コレ」

確認するように手を反らしたりを何回か繰り返す。
やはり動く。スラスラと動くよ。

「本当にあるんかよ」

自分はふう、と息をついてエリーの方を見る。

「あの、エリー？少し伺いたいことがあります」

「はい？何でしょう？」

「アサシンをご存知で？」

「はい」

アサシンいたーッ！？

この世界、アサシンいたー！

うっわマジかよ！アサシン？！

見れるとは思わなかったよ！

「あの、ヨシヤ？顔がにやけてますよ？」

「え？ああすいません」

顔がにやけていたっぽい。

「で、その人はアサシン、という事になるのでしょうか？」

「ええ、こんな夜中に来る人はそうはいませんしね、そうなるでしょうか」

「って事は目的は、暗殺、という事になるんですかね？」

「……結果から考えれば多分そうなるでしょうね」

おおう、マジで暗殺者かこの人は。

流石に普通夜中だよな。暗殺って。

白昼堂々と来るのは普通ないよな。

でも、確かあの人は白昼堂々で行っていた気がする。

視線を腕の方に戻す。

これは、多分2の方だと思う。

薬指は普通に残っているし…

あ、でも両手じゃないな、左手だけか。

うーん…構造のレベルは上がっているのに数は一つ、片方だけか…
でもあっちは両手だったはずだよな？

うん。多分神様な人が何かしたのだろうか。

じゃないとこんな魔法とかの世界でこんな物はないよな・・・

「あー分からない」

考えても分からないね、本当に。

「暗殺ですか：私を殺すつもりだったんでしょうかね」

「どうでしょうね？…ってエリー？とても冷静ですね？」

仮にも暗殺者が来たってんだから多少は怖がったりすると思うんですが。

まあ、自分が倒しちゃって何だけど。

「多少怖がったりとか、あるかと思ったんですがね」
本当に。

「私だって仮にも王女ですよ？怖い時は怖くなりますがヨシヤが来てくれたから安心ですよ」

「そうですか？責任重大ですね、頑張りますよ」

「そうですよ？責任重大ですよ？」

にっこりと優しい微笑みを浮かべるエリーさん。

責任、重大だなあ・・・

「うーん…」

お、お目覚めか。

「お、やっとお目覚めかね、メイドさん？」

と自分は声をかける。

さっき気がついたけど昼間にお世話になったメイドさんでした、驚き。

「ッ?!」

メイドさんは動こうと体を動かす。

「はい、動けないよ？縛ってあるから」

自分は後ろ手にしてある腕の所を指差して言う。

メイドさんは何回か動いていたが、諦めたのかその動きを止めた。
スズランテープスゲえ。

「いやー、昼間はお世話になったね。ありがとうね？」

「……」

「あらら、無視ですか」

メイドさんは俯いて何かを考えている様子。

「貴方、本当に近衛隊なのね？」

む、その質問か。

「そ。昼間に言うたべ？自分、近衛隊だって」

「じゃあ逆に聞くけど、君は、本当に、ただのメイドさん？」
切り返す。

「……」

「む、また無言かね」

どうすんべー、さてどうすんべー？

「まあいいや。昼間にパンくれたりしたのも『コレ』をするための何かかい？」

自分の後ろにおいてあった物をメイドさんに見せる。

「ッ!？」

メイドさんは腕を動かして持っていた物が無いかを確認したようだ。

「ん、無いだろうさ。自分の手元にあるんだから」

「いやー、それにしても凄いね君は。あの戦いの中で、コレを使うなんてね」

それを着けながら言う。

「注意を反らしてからのコレの攻撃、痛かったよ？」

シャキンーーー

刃を出す。

「完璧に殺す勢だった、のかな？」

「じゃあ君には人を殺す覚悟があつたってことだよな？」

一呼吸置く。

「その覚悟があるなら、殺される覚悟もあるって事だよね？」

「自分は、何で、君を、殺さずに、ここに連れて来たでしょう？」

言葉を区切る。

「何故、自分は、コレを、腕に、着けて、いるのでしょうか？」

着けている左腕を後ろに引く。

「ヒッ……」

メイドさんは声を上げる。

「さあて…っ」と

右手でメイドさんの肩を押して床に倒す。

「や、やめて……」

声が震えているメイドさん。

「そうか…」

左手を首の辺りに持っていく。

右手を首の下の方を添える。

「嫌あ……」

目に涙を溜めているのがもう目で見て分かる。

「無理だね。」

左腕を引く。

「じゃあね？」

左腕を振り下ろす。

カンッ！

室内に甲高い音が響く。

「なあんてね」

「えっ？」

メイドさんの驚いた声が出る。

「よっと」

床に刺したアサシンブレードの刃を抜く。

ついでに押さえていた腕を退かす。

「こ、殺さないの、ですか？」

「うん。殺さないよ、というか殺したく無いんだ」

「えっ？」

「だってこんな可愛い女の子を殺したり何かしたら、自分が世界の男どもに殺されるよ」
本当に、ね。

「所でさ、質問があるんだけどさ？良いかな？」

「は、はい？何ですか？」

「うん。今日、今日から近衛隊が出来てさ？今、メンバーがね？自分だけなんだよ」

「多分ね、姫を守るのは自分一人じゃ、無理だと思うんだ。」

「でもね、今一人しか居ないんだ。」

メイドさんの両手両足を縛ったスズランテープを切っていく。

「今後、集めるのも大変だと思うんだ。」

「それでさ、事は相談なんだけどさ？」

「え…それって…？」

メイドさんは驚いている様子。

少し間を空ける。

「近衛隊に入らない？」

「え…いや、でも…」

「自分が聞いている答えは感動詞じゃないよ。」

はい、か、いいえ、だ」

はい、か、いいえ、の所を強く言う。

「どうする？強要はしない。嫌なら嫌で構わない」

右手を差し出す。

メイドさんは少し俯いた。

「どうする？」

するとメイドさんが俺の手を取った。

「……はい。よろしく、お願いします」

「りょーかい」

仲間（後書き）

感想等々心よりお待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3189r/>

生きましょう、この世界で！

2011年10月8日20時07分発行